親潮

第 313 号
令和元年度　第 1 号
OYASHIO

北水同窓会誌
2019
313
No.1

北水同窓会のEメールアドレスが変更になりました
hokusuialumni@gmail.com

ホームページをリニューアルしました
http://hokusui.net

New 北水同窓会 hokusui.net

特集　北水の今

臼尻水産実験所、49年ぶり管理実験棟改築

□幹事長ごあいさつ　□会員の受賞　□追悼　□第99回定期総会報告
□クラス会報告　ほか

北水同窓会誌
2019 313 No.1

親潮

第 313 号
令和元年度　第 1 号
OYASHIO

CONTENTS

幹事長ごあいさつ …… 3

特集 北水の今

臼尻水産実験所、49年ぶり管理実験棟改築 …… 4
宗原 弘幸（昭61修漁）

北海道大学ホームカミングデー 2019 水産学部卒業生・在校生のつどい のご案内 …… 8

会員の受賞 …… 9
帰山 雅秀氏（昭48ゾ）／安井　肇氏（昭55ゾ）

追悼 …… 11
前田 辰昭氏（昭25エ）

第99回定期総会報告 …… 12

支部会・クラス会報告 …… 19
昭和47年増殖学科卒業第3回同期会／北水同窓会青森支部 平成31年総会・講演会・懇親会報告
昭55卒 プチ同窓会in京都／北水同窓会大阪府支部 令和元年度新卒歓迎会報告
北水同窓会石川県支部懇談会開催／北水同窓会小樽支部総会

書評 …… 23
桜井 泰憲（昭48ゾ）

寄稿 …… 24
加藤 秀弘（昭50ゾ）

新刊案内 …… 26
真鍋 康利（昭52ギ）

学位取得者 …… 27

卒業生の就職先 …… 28

会員死亡通知 …… 29

親潮投稿規定・編集後記 …… 30

お知らせ

第100回（2020年）北水同窓会 定期総会 開催案内（予告）

来年の北水同窓会定期総会は
函館支部において2020年5月30日（土）の開催予定となりました。
会員の皆様には是非ご出席くださるようお願い申しあげます。
詳細は追ってお知らせ致します。

申し込み先
● 北水同窓会函館支部　支部長 矢部　衛（昭51ゾ）　E-mail:myabe@fish.hokudai.ac.jp
幹事長 小野　浩（昭51食）
または ● 北水同窓会事務局／E-mail:hokusuialumni@gmail.com　Tel/Fax:0138-42-3681

幹事長ごあいさつ

北水同窓会幹事長
宮澤 晴彦（昭53ギ）

水田浩之前幹事長より令和元・2年度の幹事長を仰せつかり、平成30年度総会での承認を経て本年度より幹事長に就任いたしました昭和53年度漁業学科卒業の宮澤晴彦です。4年ほど前まで農学院担当で札幌に在住していたため、これまで同窓会のお手伝いをすることが全くできませんでした。浦島太郎のような状態ですが、伝統ある北水同窓会事業の継続・発展のためになんとか努力してまいりたいと思っております。同窓の皆様におかれましては、何卒ご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

北水同窓会では、年2回発行の会誌「親潮」（カラー版）やホームページを通じて様々な情報の提供を行っています。また、幹事会では支部活動の見える化（支部のHPへのリンク）や世代を超えたブリッジ形成を目指して連携強化を図ってきました。おかげさまで、支部のリンクも増えつつあります。さらに、同窓生が集う機会として毎年秋に札幌キャンパスでホームカミングデー「活躍する北水同窓生シリーズ」も行っています。本年度も株式会社きのとや・代表取締役会長として、社会の第一線で活躍されておられる、長沼昭夫氏のご講演を予定しております。在校生にとっては、自らの視野を広げ、モチベーションを向上させる極めて良い機会になると思います。これらの事業は今後も引き続いて行っていきたいと思いますので、同窓生のご講演やメッセージ、就職サポート等のご協力をお願いいたします。

北大では、平成28年6月に従来の連合同窓会を「校友会エルム」とし、全学的な同窓会を組織し動き始めました。校友会エルムでは、情報の整備、在校生や卒業生等への支援、会員間での交流、情報発信と広報、学内外での教育啓発活動、重要課題への提言を役割として掲げております。同大学中期目標にも平成27年度に設置されたグローバリレーション北大アンバサダー・パートナー制度を創設し、海外のOBに委嘱し、国際的な北大コミュティーを拡充することが謳われ、海外ネットワークを広げるべく動き出しました。大学と同窓生との相互支援体制の重要性が増してきていることを示す大きな動きだと思います。北水同窓会は、校友会エルムの基礎同窓会として位置づけられています。現時点では、まだ課題なども数多く残されておりますが、今後北水同窓会は校友会エルムの基礎同窓会としての役割も求められてくることになると思います。

同窓会が持つ機能の多様化が求められる現在、大学と同窓生との相互の支援の重要性が益々強くなっています。その一方で、会費納入率の低迷から、同窓会に対する無関心や、母校に対する愛着の希薄化が進行していることも伺えます。北水同窓会では、コンビニエンスストアからの払込による納付方法の簡便化をはかり、会費の増収を図ってきておりますが、今後の財政を健全なものにしていくためにも、更なる工夫が求められています。その意味では、卒業生間、卒業生と在校生間、同窓生と大学間でのコミュニケーション機会の拡大が必要と考えます。特に、新たな時代に同窓に加わる在学生がその恩恵を感じる機会を増やす必要があると感じます。

同窓会の役割やビジョンも、多様なネットワーク（支部間、業種間等）で成し遂げられます。大学の研究環境や教育環境および評価は、同窓の活躍なしには語れません。北水ブランドの構築に向けた相互支援が実を結ぶためにも、皆様のご支援が不可欠です。学生生活、留学、就職、転職、OB・OG訪問のサポート、人材提供機能、学会、学術、大学関連情報の提供等に、北水同窓会を十分活用して下さることを期待しております。北水同窓会の発展のため、同窓生の皆様のご健康とご活躍をお祈りし、皆様のお知恵、多様な情報のご提供やご支援をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

臼尻水産実験所、49年ぶり管理実験棟改築

宗原　弘幸（昭61修漁）

ある年齢以下の本学部卒業生の多くが実習などで過ごした、臼尻水産実験所が49年ぶりに改築されました。この機に函館に臼尻水産実験所が開設された経緯と新棟を改築できた経緯、さらに新棟の設備についてご紹介したいと思います。

写真.臼尻水産実験所の全景（撮影は、旧実験管理棟撤去前）

臼尻水産実験所開設まで（1964年～1970年）

本学部が函館に建設されたのが1964年です。それから数年間の臨海実習は、忍路臨海実験所で行っていました。しかし、余りにも遠隔地で手狭であったことから、函館近郊に適地を探しました。その時に、旧南茅部町（2004年に函館市に合併吸収）と臼尻漁業協同組合から、南茅部町臼尻（通称弁天島）に誘致を受けたのが始まりです。その御厚意をもとに、当時の増殖学科が中心となって学内で検討を重ね、沿岸増殖研究施設として概算要求したのが1966年です。しかし、最初の要求申請は、文部省留置となりました。

翌年、文部省に概算要求書を提出するも実らず、計画の練り直しを迫られました。そこで、当時サケマス漁など華やかし北洋漁業を科学的にバックアップすることで日の出の勢いにあった旧北洋水産研究施設（1995年に廃止）を拡充する計画と絡めて立案されました。それは、青函トンネルの経路選定において大活躍した有人潜水艇「くろしお号」の母船基地を兼ね、4つの研究部門、8名の教員団で構成する壮大な『北洋水産研究施設整備拡充（臼尻臨海水産実験所）案』で、時の南茅部町長米田陽氏（1971年7月3日「ばんだい号横津岳墜落事故で客死」）と臼尻漁業組合長吉崎庄太郎氏（故人）の「設置方願い書」も添付し、地域を挙げた海洋立国日本の未来を牽引するぞ、という水産学部の大望を具現化した計画でした。しかし、惜しいところまで行ったものの、文部省のファイナルアンサーは留置でした。機は熟したと確信し、自信を持って送り出しただけに、研究施設の設置の困難さを物語る逸話と落胆と失望を水産学部に残し、計画は霧散しました。

しかし、それでも増殖学科はめげませんでした。度重なる留置の仕打ちを受けながらも、実習施設だけは、どうしても必要、また臼尻地区の期待も背負った。この熱い要望は、大学本部を動かし、1969年6月、臼尻緊急営繕工事費として、設置がついに認められました。早速、同年10月には起工の運びとなり、翌1970年には、弁天島周辺の岬突端4,491㎡の敷地に、鉄筋２階建て総床面積800㎡の

実験管理棟と576㎡の宿泊棟（団塊ジュニア世代の入学定員増期に休憩室を宿泊室に改修し、現在定員75名）が建設され、北海道大学水産学部付属臼尻水産実験所の開設元年となりました。

（ここまで、主に「北海道大学水産学部広報 2号－昭和44年12月1日発行－」を参照）

新実験管理棟改築への動き（2013年～2017年）

開設された臼尻水産実験所は、当初の計画よりもコンパクトな施設となったものの、増殖学科と漁業学科、さらに学部改組を経て学科名称を変えた、生物生産学科、海洋生物科学科、増殖生命科学科などの実習、また水産学部各学科生の卒業研究や大学院の研究などにも使われてきました。設置から約50年、臼尻水産実験所で実習あるいは研究活動を経験し、社会に旅立った水産学部卒業生は約6,000人にのぼります。

設置当時は、函館キャンパスと臼尻水産実験所までの道路事情が悪く、対向車とのすれ違いも難儀な峠道で、自動車でも片道90分近くかかり、特に冬は凍結した下りカーブの連続で自損事故が多発したようでした。しかし、40年以上も前に全面舗装され、その後も道路やトンネルの拡幅工事と直線化工事が進められ、要所要所にロードヒーティングも施されました。今や、森と湖を眺めて走る、四季の移ろいが伝わる快適なドライブロードになっています（ただし、シカやクマとの遭遇頻度が高く、衝突事故は頻発中）。こうした交通アクセスの改善に加え、岬突端にあるため海水が清澄で、前浜も多様な海浜生物の生息地となっています。また、沖合は親潮と黒潮が混合する海域で、道内有数の水揚げを誇る臼尻漁港があることなどの立地環境の良さに気づいた教育、研究グループを中心に、延べ人数で年間4,000人が訪れ、近年は本学部以外の利用も増加しています。それでも50年前の宿願だった沿岸増殖研究施設に代わる施設として開設された臼尻水産実験所の現状は、尽力された方々の期待通りではないかも知れません。しかし、継続は力になると信じて進むしかありませんでした。

そうするうちにも建物の老朽化は進みました。一方、度々起こる地震によって耐震基準もより堅牢なものへとシフトしていきました。その老朽化が進んだ実験管理棟に関する改築計画が2013年頃から本学で具体的に検討されるようになりました。臼尻水産実験所は、2001年に北方生物圏フィールド科学センターという全学共同利用施設が発足した際に、洞爺臨湖実験所や七飯淡水実験所とともに参画していました。そのため、部局としては、水産学部を離れていましたが、概算要求においては、「水産系施設」の枠で提出することになりました。

この改築計画も、設置時のように順調には進みませんでした。最初に申請したのは、耐震構造の補強工事を時限付きで文科省が設定していた予算枠でした。臨海地区にあるため、鉄製構造体の腐食が外壁の内部から深刻なほどに進み、老朽度の勝負なら勝てる自信がありました。しかし、手応えなく不採択が続き、時限最後の年も良い知らせを聞くことはありませんでした。耐震基準に満たしていない施設で教育研究活動することは、日本の国立大学において容認されることではありません。存続さえ危ぶまれ、前途に暗雲が立ち登りました。瀬戸際に追い込まれたその年、文科省の方から、「築後50年近く経ち、十分に老朽化している。いっそのこと新築で概算要求しては、どうか」という提案を示唆されました。これを天の声というのだそうです。新築の条件は、「施設面積を2割減らすこと」でしたが、この先、数十年使うことを考えれば、少々狭くなっても新しい建物を手に入れることの方が、ずっと御利益のある話です。一もなく二もない、「是非、お願いします」と返事をしました。

お墨付きをもらい、悠々採択確実と思われた施設整備要求も、初年度は惨敗でした。この年は、他大学でも施設整備事業の不採択が多く、とある情報筋によると、国立競技場など東京五輪関連の予算が膨張し、そのとばっちりだそうです。敗因がこちらにないと分かれば、再度アタックするのみです。「勝者は、何度負けても勝つまで粘った者のことをいう」、そんな格言を聞いたことがあります。結果的には、この時もダメでしたが、補正予算で救われ、2017年の年末に吉報が届きました。粘って下さった本学事務方の皆さんと文科省官僚の皆さんには、頭が下がる思いしかありません。

新実験管理棟建設（2018年～2019年）

予算がつき、年が明けると、図面づくりが始まりました。実験所には、建築士の資格を持った者がいないので、プレゼンテーション用ソフトの画面に四角と線で部屋割りした絵を描くしかできません。その絵を施設部の方と設計業者さんが数値を入れて、精密な設計図にするという作業が終わったのは、6月でした。価格計算をして、いざ入札公告。しかし、あろうことか、8月になっても、落札業者が決まったという連絡がありません。年度内に建つんだろうか、とやきもきしていていると、入札不調のお知らせ。

建設資材と人材が東京に集まり、地方では建設経費が高騰し、北大の設定した金額では、落札されなかったのだ、と情報筋が分析してくれました。またも東京五輪のとばっちりです。最終的に建設業者が決まり、鍬入れが始まったのは、山の緑が朱色に染まる10月に入ってからでした。

ここまで長かったので、工事は、順調に進んで欲しいと願っていました。しかし、掘削が始まると、怪しげな金属片と油分を含んだ異臭を放つ残土が出土しました。有毒物質かも知れず、正体が判明するまで工事は、中断となりました。南かやべ地区は、縄文遺跡による世界遺産を目指しています。縄文時代にすでに鉄器が使われていたのか、という驚愕の声もありましたが、実験所の敷地は、縄文海進の時代は海の中です。10日後、分析の結果が伝えられると、コールタールの鍋と判明。臼尻水産実験所の元技術職員嵐田洋悦氏らに尋ねると、その昔（といっても昭和の中期頃まで）、木綿または麻の網や綱など腐食する漁業資材は、大鍋で沸かしたコールタールに漬けてから使っていたそうで、その残骸であることが推察できました。油田発見のまさかの期待もありましたが、世界遺産にも産業遺産にもほど遠い廃棄物と言うオチで工事は再開されました。

今の建築技術と道具の発達は、すごい。現場をテントですっぽり覆って、ジェットヒーターを使えば、吹雪の日でも速乾剤を混ぜてコンクリート打設をやってのけます。再開後の工事は順調に進みましたが、入札不調の影響で、内装工事を大凡終えて、大学に引き渡しとなったのは4月末でした。連休明けに断捨離を兼ねながら引っ越しました。新棟に移り、研究室のリセットには、思いのほか手間取りましたが、7月26日に地元のお披露目、7月30日に竣工祝賀会を終え、一段落したところで実習シーズンインです。この一年間、それまでに比べて多忙な日が続きましたが、楽しい月日でもありました。院生時代に経験した北洋水産研究施設廃止の際の引っ越しは、巡り会いの悪さを少しだけ恨みましたが、今回の引っ越しは、巡り会いの幸運をとても感謝しています。

新実験管理棟の設備（2019年～）

新実験管理棟は、鉄筋コンクリート造りで総床面積640㎡です。旧棟では、集中暖房用の重油タンク庫と下水浄化槽室がかなりの面積を占めていましたが、新棟は灯油ストーブによる個別暖房、浄化槽は地下に埋設でスリム化し、実質の有効スペースは減らしませんでした。50年前と比べて、昨今は女子学生が増加しています。旧棟は、

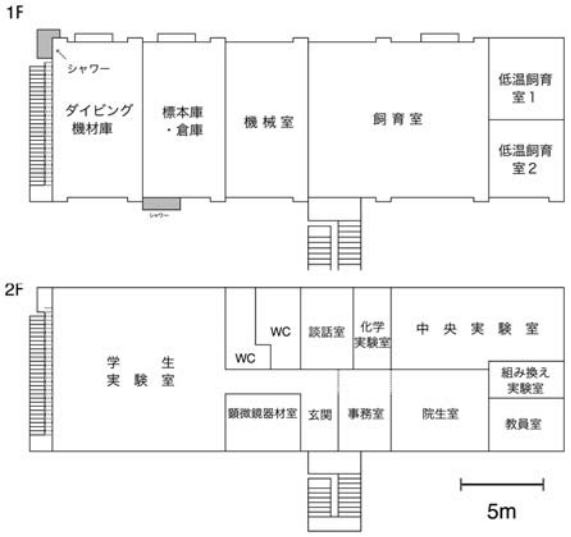


図.新実験管理棟見取り図

おまけ程度の女子トイレでしたが、新棟では広さが数倍あり清潔感あふれる空間になりました。そのため学生実験室は少し窮屈になりましたが、最新の実験テーブルを24台購入していただき、48人の実習室として十分の広さです。もちろん、生物実習には欠かせない顕微鏡類もライカ製45台、オリンパス製15台が既設で、将来、水産庁長官や大学総長、上場企業の社長をめざす北大水産学部生にふさわしい快適な学びの空間になっています。

人間が過ごす空間も、もちろん大切です。しかし、臨海地区にある実験所の使命は、海水を施設に引き込み、海棲生物の飼育や実験に、どれだけ対応しているかにあります。心臓部にあたる海水の引き込みと濾過設備は、従来どおりですが、制御システムは、格段にシステマティックになりました。トラブル発生をいち早く感知でき、バックアップ電源も備わっているので、停電でも飼育環境や凍結保存試料には影響しない仕組みになっています。また、5℃～20℃まで室温を制御できる25㎡の広い低温室2室を水槽室（約110㎡）に併設しました。こうした飼育設備により、プランクトンからイルカまで飼育実験が可能な環境が整備されました。

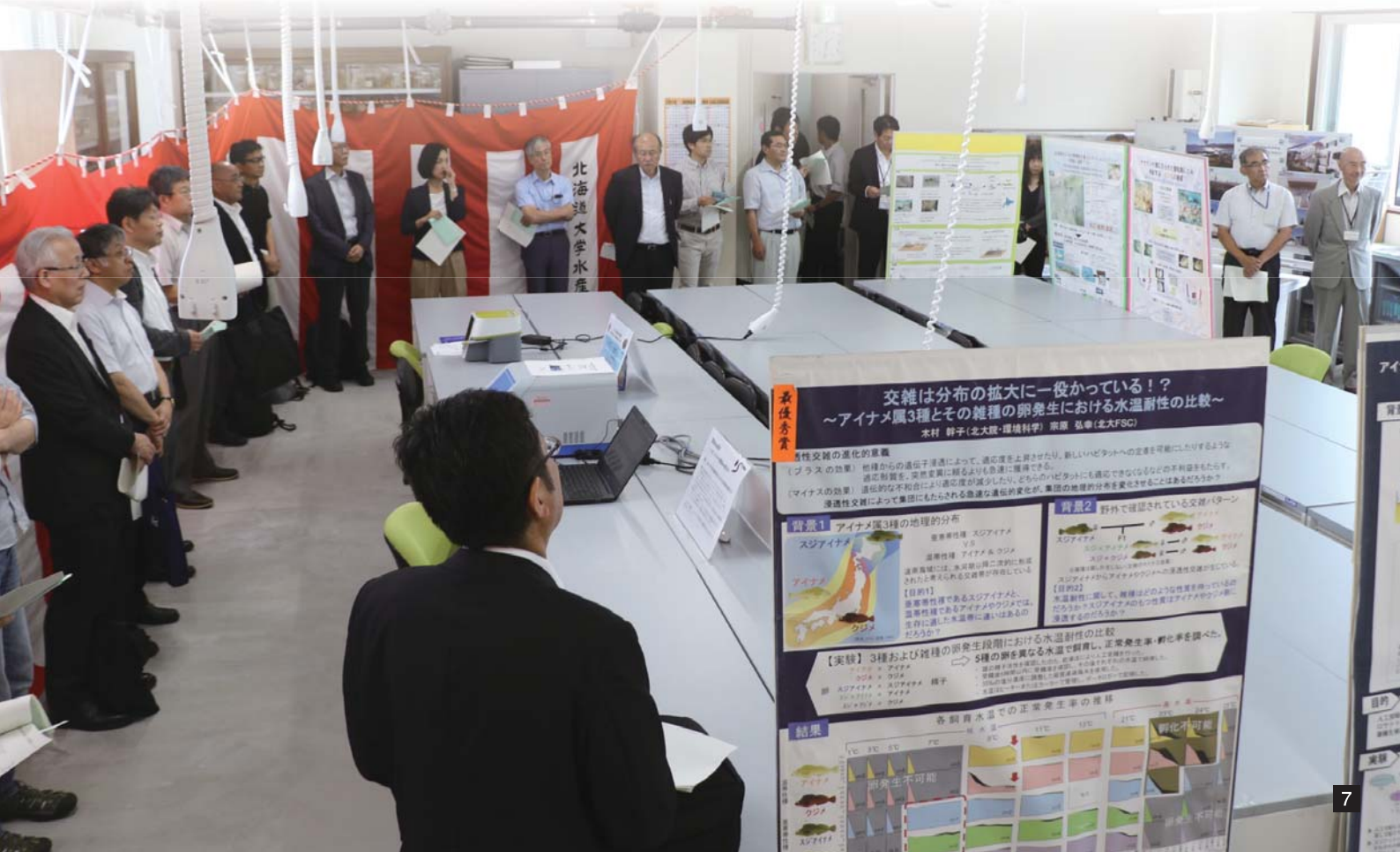
その他、研究室には、遺伝子抽出、増幅、分析機器類を備え、また遺伝子組換え実験やドラフトチャンバーや強制排気装置つき実験テーブルなどもあり、生物科学の一般的研究ができる設備になっています。一方、前浜には、敷地内からアクセスできるダイビングスロープがあります。さらに、70名以上のシュノーケリング機材、スキューバ潜水の機材も10名分あり、空気圧縮充填コンプレッサー（バウアー製マリーナ）と水中スクーターも5台もありま

す。ここまで海中作業に特化した設備を持つ水産実験所は、国内随一です。

このようにマクロからミクロまでの生物研究や実習ができる設備が整えられました。50年前の水産学部と臼尻地区が大望した施設とその時に描いた未来に比べると、まだスケールは小さいかも知れません。しかし、今の緊縮した時代背景を考慮すると、新棟が建設できたことは、たいへん大きな期待を託されたと言うことです。新施設は、今まで以上に水産科学と地域の発展、そして人材育成に貢献していく必要がありますし、それが出来る立地にあると思います。いつか、またやって来る次の転換期をどのような状況で迎えるか、今からとても楽しみです。

臼尻披露　（編集委員会）

2019年7月30日に、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション臼尻水産実験所竣工記念式典が行われました。佐藤冬樹センター長、木村暢夫水産科学研究院長（昭55ギ）ら水産試験研究機関関係者の列席のもと施設がお披露目され、宗原弘幸場長（昭61修漁）が場内各種設備について説明しました。その後、函館駅前のホテルに会場を移しての祝賀会が、函館国際水産・海洋都市推進機構長を務める嵯峨直恆氏（特）の発声により開宴となりました。会場では再び宗原場長により、臼尻実験所の特長、これまで得られた研究成果そして社会貢献の内容についての紹介があり、最後に南かやべ漁業協同組合の鎌田光夫代表理事組合長による一本締めで終宴となりました。組合長の「各種会議や会合で国内水産業関係の重鎮達に接する機会が少なくないが、その中で北大水産学部出身者は高い割合を占めており、彼（女）らの多くから臼尻実験所での思い出を聞かされる」とのお言葉が印象的でした。



北海道大学 ホームカミングデー2019

水産学部卒業生・在校生のつどい

講演会 夢多き人生

講 師 **長沼昭夫**氏（昭47年漁業学科卒、(株)きのとや代表取締役会長）

日 時 令和元年（2019年）9月28日（土）
14：00～15：30

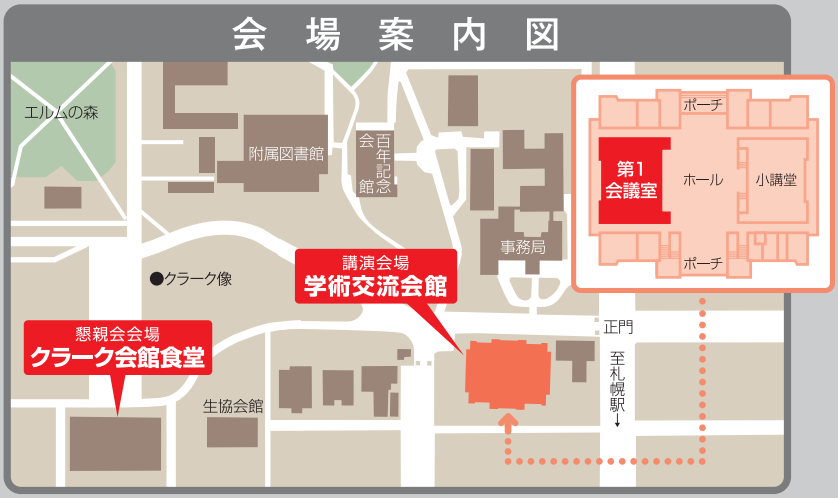
場 所 学術交流会館 第1会議室

参加申込不要

profile プロフィール

(株)きのとや 代表取締役会長
1947年生まれ。札幌生まれの札幌育ち。大学生時代はスキー部に所属。1972年水産学部漁業学科卒業後、新冠町において農業に従事、1976年から北海道ダイエー(株)での勤務を経て、1983年に「洋菓子きのとや」を創業、1985年に「株式会社きのとや」を設立し、代表取締役に就任し、2015年から現職。(一財)北海道菓子協会理事長をはじめ業界関連団体の理事長等を歴任。2017年からは北海道大学 校友会エルム理事に就任し、同年、給付型奨学金「きのとや奨学金」を設立し、社会に貢献できる人材育成や「札幌農学校」の売り上げの一部を研究教育支援のため母校である北海道大学に寄付するなど、講演者の社会貢献・支援活動は幅広い分野に及ぶ。

会 場 案 内 図



講演会終了後、懇親会を開催します。

16：15-17：45 クラーク会館食堂 ※事前申込が必要です。
HP(https://www.hokudai.ac.jp/home2019/)をご覧下さい。

会員の受賞

CONGRATULATIONS ON WINNING

帰山　雅秀 氏（昭48ゾ）
平成30年度日本水産学会賞
「サケ属魚類の持続可能な資源管理にむけた生態学的研究」

工藤　秀明（平3ゾ）

本学名誉教授（元水産科学研究院教授・国際連携機構特任教授、現北極域研究センター研究員）帰山雅秀氏は「サケ属魚類の持続可能な資源管理にむけた生態学的研究」に関する優れた研究業績により、平成30年度日本水産学会賞を受賞されました。

帰山先生は、昭和48年に水産増殖学科水産動物学講座を卒業後、水産庁管轄の北海道さけ・ますふ化場に就任され、サケに関する研究を本格的に開始されました。昭和60年には、北海道大学（旧鹹水増殖学講座）で水産学博士の学位を取得され、平成7年には調査課繁殖制御研究室長、平成9年には改組により水産庁さけ・ます資源管理センター調査課生物資源研究室長になられました。平成10年には北海道東海大学の教授に就任され、平成12年からはアラスカ大学フェアバンクス校の客員教授も併任されております。平成17年には、北海道大学大学院水産科学研究院（資源保全管理戦略分野、のちに海洋生物資源保全管理学分野）の教授として着任され、数多くの優秀かつ個性的な人材育成に尽力されました。平成25年春に定年を迎えられ北海道大学の名誉教授、そして国際本部（現国際連携機構）特任教授になられ、国際教育プログラム「新渡戸カレッジ」を強力に推し進められました。平成30年春からは北極域研究センターに所属されております。

帰山先生は、サケ属魚類の生活史や個体群動態、種間相互作用など生態学的な研究を長年に渡って進められ、国内外でこの分野をリードしてきました。特に、鱗相分析による年齢・成長履歴と個体群動態の解析から、回帰する個体の小型化や高齢化が個体数増加に起因する密度効果に依ることを世界で初めて実証し、環境収容力の概念の有効性を示されました。また、長期的な気候変動がサケ属魚類の環境収容力と海洋生態系に及ぼす影響や今後の地球温暖化がサケ（シロザケ）の海洋分布や回遊に与える影響も示されています。知床世界自然遺産地域においては、サケ属魚類の産卵遡上が海由来の物質を海から森に運ぶ物質輸送のメカニズムを明らかにされております。さらに、野生魚（自然産卵魚）を考慮したサケ属魚類の資源保全の重要性を科学的データに基づきいち早く提唱され、現在では一般にも広く受け入れられています。これらの研究成果は、いずれも国際的に高く評価される独創的、先駆的なものであり、サケ属魚類の資源管理のみならず海洋生態系の保全にも大きく貢献するものであります。（より詳しい内容は，北海道大学出版会から昨年出版された「サケ学の誘い」をご覧下さい。）

以上のように帰山先生は、サケ属魚類の生態学的研究において、国内外でも評価が高い業績を多数挙げられ、これまでにも平成18年度日本水産学会賞進歩賞を受賞されており、現在もこの分野を牽引し続けられております。今回の受賞は、研究指導していただいた卒業生や一緒に研究した我々にとっても誠に嬉しいことであり、帰山先生の益々のご活躍を期待しています。

会員の受賞

CONGRATULATIONS ON WINNING

安井　肇 氏（昭55ゾ）
平成30年度
北海道科学技術賞受賞
「ガゴメの特性を生かした産学官連携による産業クラスターの形成」

水田　浩之（昭61ゾ）

本学教授安井肇氏は、「ガゴメの特性を生かした産学官連携による産業クラスターの形成」の功績により、平成30年度北海道科学技術賞を受賞されました（平成31年2月14日贈呈）。

安井肇氏は、昭和55年に水産増殖学科水産植物学講座を卒業後、同講座で大学院水産科学研究科に進学し、有用海藻の細胞学的研究に取り組み、その後昭和62年に水産学部助手として採用され、現在に至るまで有用海藻の増殖学的研究に携わっておられます。また、早くから沿岸域の主要藻場構成種であるコンブ類やホンダワラ類の保全・増殖にも目を向け、海洋生物と私たち人間との共生を目指した視点での教育研究に従事しておられます。

そのような教育研究過程で、産業重要種であるマコンブと競合する雑海藻として取り扱われていたガゴメコンブが持つ高い粘性に着目し、ガゴメコンブの生物的特性や生化学的特性解明などの基礎研究を進め、その高い粘性がフコイダンであることを突き止めました。また、その有用性・高付加価値化を図るため、生産技術の開発や商品開発にも携わってこられました。生産技術の開発では、ガゴメの生活環（ライフサイクル）を制御したフコイダンを高含有するガゴメのバイオファーミング（BF）技術を開発し、これにより新しいガゴメの生産体系が確立し、ガゴメコンブの最適育成海域選択モデルの開発などの新たな技術を加えて、安定した生産を支える技術として成長を続けています。現在では、食用だけでなく化粧品、化成品、医療用原材料などとして開発・活用・実用しており、200億円以上の経済波及効果を生むに至っています。さらに、同氏が主導的に行ってきた「水産・海洋分野での産学官連携を担う人材養成（北大大学院水産科学研究院と函館市）」など、地域資源の継続性を維持・拡大しうる、強固な人的ネットワークを構築するなど、人材の育成にも貢献されてこられました。

以上のように安井肇氏は、北海道を代表する資源であるガゴメの価値を全国のみならず海外へ広く普及させ、科学技術に裏打ちされた産業クラスターを形成するとともに、それを支え続ける未来の人材の育成プラットホームの構築に尽力されています。

これからも、健康に留意され益々のご活躍を祈念申し上げます。

追悼寄稿

前田辰昭先生（昭25エ）を偲ぶ

髙橋　豊美（昭44エ）

本学名誉教授前田辰昭先生が平成30年12月18日午後3時37分に、90歳2ケ月のご生涯を閉じられました。半年前に大動脈弁狭窄症と診断され、治療を続けられておりましたが、腎臓の悪化も進み、永遠の眠りにつかれました。

前田先生は、昭和3年に青森県陸奥湾の入口に近い平舘村にてお生まれになりました。ご実家は代々定置網漁業を経営する旧家で、先生は海に親しんで育ち、子供の頃にすでに漁具を作り、簡単な漁法や櫓櫂の漕法を身につけたそうです。旧制中学時代にたまたま青森港に停泊していたおしょろ丸Ⅱ世を見掛け、憧れを覚えたことが、函館水産専門学校の遠洋漁業科に進学する直接の動機になりました。3ケ年の座学、半年間の練習船実習、1年間の社船実習を終えて、昭和27年11月にご卒業後、同28年4月北海道大学水産学部助手に採用され、同44年9月講師、同49年4月助教授に昇任されました。昭和59年9月には「噴火湾およびその周辺海域におけるスケトウダラ成魚群の生態に関する研究」によって水産学博士の学位を授与され、同60年4月教授に昇任、漁業学科漁場学講座を担当、平成4年3月定年により退職されました。

先生が教官として勤務されるようになった当時はマッカーサー・ラインの撤廃によって、北洋漁業の再開をはじめわが国の遠洋漁業が世界の海に広く展開され始めた時代でした。先生は練習船北星丸による道東のサケ・マスや武蔵堆の底魚の調査に出掛け、漁場調査法を身につけられたのち、水産庁の依頼で北西太平洋のサケ・マス資源調査等の船長兼調査員としてご活躍になりました。その後、前田先生の恩師である斉藤市郎教授（昭7ギ）が北洋水産（株）の重役として母校を去り、ベーリング海東部の底曳網船団長を務めることになったことが、先生がこの海域の底魚資源研究に着手する契機になりました。はじめコガネガレイが研究対象でしたが、スケトウダラの産業需要が増したことから、前田先生のライフワークである「スケトウダラ資源研究」がスタートしました。その結果、それまで不明であった本魚種の生活様式や回遊機構、資源量水準等が明らかになりました。

昭和40年代になると、海洋の分割に関する国際海洋法会議が、200カイリの漁業専管水域設定へと進展していきました。わが国の主権が及ぶ沿岸域における資源研究の重要性が増すことになり、本学調査研究船うしお丸の竣工を機会に噴火湾とその周辺海域のスケトウダラをはじめ、同海域のアカガレイや青森県沿岸の底魚の研究に精力的に指導従事されました。

当時、日本沿岸の資源研究が漁獲物解析に偏重していたため、先生は現場重視の研究を一貫して実践され、現場に強い研究者を多数育て上げ、世に送り出されました。

先生は、大学・学部の管理運営においてもご尽力され、北海道大学評議員や学科長等の要職を歴任されました。先生の水産資源に対する情熱は退職後も衰えることなく、資源解析や報告会、講演を続けられるとともに、学術研究支援財団の理事長、水産庁および北海道・青森県の資源管理関係等の委員を多数務められ、国と地域の漁業の発展にも多大な貢献をされました。

先生のお人柄については、当時の教室付き事務官佐藤かのさんが次ぎのように述べています。「前田先生は真面目ひとすじ。海に生まれ、海に育ち、海の研究に身も心も捧げてきた海の男そのものの先生。学生の教育にも誠心誠意で当たられ、いつも漁民の立場に立った仕事をされてこまめに報告書を出し、漁業組合の人達から信頼が厚かった。誰もが言うように本当によく働き、よく学び、頑張り屋さんであった。何事にも「有難う」と言われる先生の姿は教訓的だった。」

前田先生の退官記念文集に、ご自身がこのような文を書き記しています。「スケトウダラ資源研究は何時しか、私のライフワークとなってしまった。郷里で医師・村長をされた従兄が私の人生を称して、「吾道一以貫之」という書を送って下さった。正に海ひとすじの人生であったと思うし、今後もそうありたいと願っている。」

お亡くなりになってから、先生の長年に亘る教育と研究、社会貢献へのご功績に対し、正四位瑞宝中綬章が授与されました。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

第99回 北水同窓会定期総会報告

北水同窓会総会の報告とお礼

●開催日時：令和元年5月25日（土）
●会場：名古屋港ポートビル

第99回北水同窓会定期総会をレポートした。

〔総会〕総会は令和元年5月25日午後2時より、名古屋港ガーデン埠頭にある名古屋港ポートビルで開催された。この埠頭はかっておしょろ丸Ⅳ、Ⅴ世がそれぞれ入港し、このビルはその際に歓迎会を開いた馴染深いところであった。参加者は80名であった。

横山会長は極めて多忙のなか、重要な会議の合間を縫ってこの総会を優先してご出席下さり、到着早々の第一声が総会の会長挨拶となった。まず、会長は、司会を率先して買って出たNHKアナウンサー村上由利子（平8ゾ）さんの才色兼備な姿に目を留められ、女性活躍の話題になった。その先駆けとして北水女性第1号の麗しい女子学生であった奥様に話が移り、仲の良いご夫婦像を披露された。会場はなごんだ雰囲気に包まれた。このように闊達で朗らかかつ迫力満点の会長の姿はまさに北水同窓の象徴躍如としたものであった。

議題に入り、議長に愛知県支部長山口晧(昭44エ)が選出された。議題説明は本部水田幹事長から始まり、詳細説明は各担当役員が担われた。担当と役員名は定期総会次第を参照されたい。第一号議案(今年度の事業報告と会計報告)、第2号議案(次年度事業予定と予算)が承認され、この間に逝去された方々に対し30秒の黙祷をささげた。また会員名簿発行とネット利用についての質問があった。今年度はこれまでのように名簿を配布し、次回からはネットを主体に、希望者のみに名簿は配布する、という方向で検討したい、との回答であった。

次いで、木村名誉会長の挨拶では、母校の活発な活動の様子が報告され、卒業生にとって現況を知る貴重な機会となった。さらに安井理事代表が中学高校生を対象としたプロジェクトの説明をされた。いわば海の甲子園ともいえるこの自由研究プロジェクトは全国から多数の応募があった。優秀な作品にはプレゼンテーションの場が用意され、おしょろ丸乗船の機会も与えられ、受験生へのアピールにもなろう。同窓の皆様はこの応募ポスターの配布に助力いただければ幸いである。

〔講演会〕総会の出し物として講演会が開かれた。テーマは『伝統を紡ぐ人たち～フロンティアスピリットを具現化するフィールドワーク3例～』として以下の演者が競演された。

福地光男（昭45ゾ）名誉教授 国立極地究所、総合研究大学院大学 北海道大学 東京オフィス前所長
：南極から地球を、宇宙を観る～日本南極地域観測隊の歩み～

早瀬茂雄（昭45ギ）元独立行政法人水産総合研究センター 国際研究交流官
：雑感ウナギ論

水野隆夫（昭44ギ）元厚生省国立公園部 元環境省国立公園レンジャー
：幸せな渡り鳥～人と自然を愛して台湾のお隣西表からクナシリのお隣知床まで～

いずれの演者もその分野のフロントランナーとして活躍してきた専門家で、熱の入った真摯な講演は聴衆を飽きさせることはなかった。

〔宴会〕宴会は部屋を替えて愛知県支部長山口晧の歓迎の挨拶で始まり、元愛知県支部長,現顧問深谷勲（昭36セ）氏による乾杯の音頭、次いで千葉から駆けつけられた昭28（エ）年卒の大先輩佐藤和夫さんの紹介があった。宴の合間を縫って、扇子80本を寄付された深谷勲氏から、筆を執られた引き出物の説明があり、同じく「おしょろ丸」と「冬の函館港」のポストカード300枚を制作された高橋豊美名誉教授の紹介があった。このおしょろ丸の50号原画は母校に寄付される手筈である。

宴は続き、総会会場正面に掲げられた「おしょろ丸旗」を持参いただいた大阪支部長佐々木雅人（昭56化）、兵庫高木英男（昭59ギ）、静岡木嶋武郎（昭45

エ）支部長等の紹介と本部副会長鈴木賢一（昭36セ）氏のスピーチもあり、盛り上げていただいた。エールは次回100回総会を主催する函館支部矢部衛（昭51ゾ）氏に渡された。最後の締めは、事務処理一式を引き受けられ、成功に向けて奮闘された愛知県支部副支部長兼崎英勝（昭41セ）氏による次年度に向けての抱負で終わった。ここで、HHKアナウンサー村上由利子氏には、多忙の中、出席され、議事進行のシナリオに入念なチェックをいただいた。謝意を表したい。

最後は恒例の寮歌「都ぞ弥生」で大団円となった。

〔二次会〕二次会は二階に会場を移して開催され56人の出席があった。多数の同窓の来名には総会にかぶせてクラス会（昭44ギ、昭44エ）、啓徳寮会としたことも幸いした。大層盛り上がり、遅くまで話は尽きないようであった。皆さま、大満足で帰られたように見受けられた。また、札幌、函館、東京、大阪、四日市、兵庫などを拠店にハガキ、電話、ネット、メール、ロコミなどで勧誘いただいた皆様のおかげがあった。

〔反省会〕愛知県支部での反省会では12人の出席者があった。他県の総会出席者からも講演会についての意見をいただいた。全体に見て好評であり、3人の演者による競演は「硬軟織り交ぜて退屈せず面白かった」、その一方で全体的に見て「まとまりに欠けた」、という意見もあった。これは当然に予想されたことで、最初の趣旨説明と最後のまとめを欠き、書物で言えば序章と終章がないに等しいものであった。これは企画した私が遠慮して表に出るのを遠慮したためであり、熱心な競演をされた演者には申し訳ない気持ちである。

個々の講演については、「やわらかすぎるもの、学術的なものはこの場にふさわしくない」との意見もあった。当初、沖縄の基地の問題を自然保護の立場から論じ、戦後日本の縮図といえる沖縄の問題を広く皆様に披瀝し、知っていただく良い機会と考えていた。ところが演者は、政治問題に触れることを遠慮してか、“ふんわり”?とした内容に直前に取り換えてしまったようだ。折角の機会を勿体ないことをした、と思うのは私だけであろうか。しかし、ここで学ぶべきは演者の生き方であろう。青春の夢を一途に追い求め、強い意志と粘り強い性格でそれを実現してきており、今も進行形である。彼の生き方は今回のテーマにふさわしいものであり、特に現役の若い人には今風に言えばレジリエンス（復元力）に特化した豊かな人生に目を留めていただきたいと思うが如何。

“ウナギ”に関しては、「幅広い知見が得られた」との評価もいただいた。人工ふ化に若き日の元学部長山内晧平氏が世界で初めて成功し、雑誌ネイチャーの表紙をまさに飾ろうとしてから50年。今やこの仕事は国の研究所や県の水産試験場で完成しようとしている。この間に、天然ウナギの産卵場所に迫る東大海洋研究所（演者は博士課程をこの講座で過ごした）の仕事の紹介もあり、時節を得たものであったと思っている。

主要講演とした。“南極”の話題は、元南極観測隊長の登壇という話題性もあり、これを聞くための参加者も少なからず、開催前からこの話題で盛り上がっていた。飽きさせない話術と周到な準備、南極の氷と家庭の冷蔵庫の氷との比較実験等細やかな気配り。さすがであった。

講演会とは何だろうか。一方的な一方向の話ではなく、聴衆が反応し双方向で議論が始まれば望ましいと目論んでいた。この狙いは当たった。講演会のテーマと内容に触発され、所賀（昭39エ）氏による11ページに及ぶレポートが誕生した。南極の話題から始まり、水産業界の問題点の整理、そして提案として「北水の同窓で遠洋漁業に携わった面々が、自らの経験を整理し、纏めるべきではないか。今を除いて他にない」というものであった。経験者は所賀先輩の旗のもとに集っていただきたいところである。詳しくは今後紹介されるであろう所賀レポートをお読みください。

次回、第100回北水同窓会総会が楽しみである。

なお、ここで今回の講演にあたり、資材（防寒着、靴、南極の氷そして北極と南極のパンフレット400部）等の貸与提供をいただいた国立極地研究所に感謝申しあげます。

愛知県支部長 山口　晧（昭44エ）

第99回 北水同窓会定期総会報告

■出席者

〈 本部参加者 〉

横山　清	(昭35エ)	同窓会長
木村　暢夫	(昭55ギ)	名誉会長
安井　肇	(昭55ゾ)	代表理事
水田　浩之	(昭61ゾ)	幹事長
岸村　栄毅	(昭60化)	副幹事長
山本　潤	(平５ギ)	庶務部幹事
河合　俊郎	(平12生)	組織部幹事
工藤　秀明	(平３ゾ)	編集部幹事
大西　広二	(平元ギ)	会計部幹事

〈 参加者 〉

伊藤　和夫	(昭28エ)	神奈川
深谷　勲	(昭36セ)	愛知
本多　純夫	(昭36セ)	愛知
鈴木　賢一	(昭36セ)	千葉
角田　靖雄	(昭36セ)	神奈川
斉藤　毅	(昭36ギ)	函館
石川　光男	(昭36セ)	神奈川
川西　義隆	(昭37セ)	愛知
小野里　担	(昭37ゾ)	長野
荒井　城一	(昭37ゾ)	愛知
内田　奎司	(昭37ギ)	愛知
小林　正昌	(昭39ゾ)	京都
三栗　茂	(昭39ギ)	愛知
中村　昭次	(昭39エ)	岩手
所賀　壮一	(昭39エ)	静岡
近藤　忠實	(昭40ギ)	愛知
畦地　清信	(昭40ゾ)	岐阜
兼崎　英勝	(昭41セ)	愛知
藤井　洋治	(昭42ギ)	愛知
武田　雷介	(昭42ゾ)	兵庫
水戸　孝夫	(昭43ギ)	函館
河村　悦春	(昭44食)	小樽
広瀬健一郎	(昭44ギ)	大阪
谷口　義信	(昭44ギ)	三重
伊藤　迪男	(昭44ギ)	札幌
山口　晧	(昭44エ)	愛知
重田　親司	(昭44エ)	東京
松浦　光紀	(昭44エ)	小樽
山下　明則	(昭44エ)	札幌
水野　隆夫	(昭44エ)	沖縄
高橋　豊美	(昭44エ)	函館
安村　恵司	(昭44食)	兵庫
吉川　圭一	(昭44エ)	大阪
内藤　義和	(昭44エ)	函館
大場　清昭	(昭44ギ)	東京
高越　哲男	(昭44ゾ)	福島
雨谷　清治	(昭45ギ)	札幌
福地　光男	(昭45ゾ)	埼玉
早瀬　茂雄	(昭45ギ)	愛知
木嶋　武郎	(昭45エ)	静岡
入江　和彦	(昭45ギ)	大阪
福田　一義	(昭45化)	札幌
大畑　育雄	(昭45化)	富山
西川　一義	(昭46ゾ)	滋賀
日野　輝幸	(昭46ギ)	愛知
堀場　宏昌	(昭47ギ)	愛知
岡本　洋一	(昭48ギ)	大阪
石田　眞	(昭48ギ)	兵庫
山田　勉	(昭48ギ)	愛知
久保　隆司	(昭48ギ)	千葉
品川　高儀	(昭49化)	神奈川
小池　徳治	(昭49化)	愛知
田中　文夫	(昭50食)	大阪
矢部　衛	(昭51ゾ)	函館
神保　重孝	(昭54ギ)	愛知
佐々木雅人	(昭56化)	大阪
山田　智	(昭58ゾ)	愛知
高木　英男	(昭59ギ)	兵庫
馬場　信吾	(昭60化)	三重
宮本　淳司	(昭60ギ)	愛知
小島　茂樹	(昭61化)	愛知
伊藤　浩	(昭62化)	愛知
釜谷　明	(平３食)	東京
春日井　隆	(平３ゾ)	名古屋
近藤　茂之	(平３食)	三重
丸林由利子	(平８ゾ)	愛知
山本　大輔	(平18海生)	愛知
山本　裕也	(平23海シ)	
西村　浩明	(平26海生)	三重
岩道　美里	(平27海)	愛知
大洞　裕貴	(平28海)	愛知

■総会次第

1. 開会の辞　副幹事長　岸村　栄毅(昭60化)

2. 議長選出

3. 議案第１号

平成30年度事業経過報告および会計決算報告

(1)一般経過報告
幹事長　水田　浩之(昭61ゾ)

(2)庶務部報告(資料1)
庶務部　山本　潤(平５ギ)

(3)編集部報告(資料2)
編集部　工藤　秀明(平３ゾ)

(4)組織部報告(資料3)
組織部　河合　俊郎(平12生)

(5)会計部報告(資料4)
会計部　大西　広二(平元ギ)

(6)会計監査報告
会計部　大西　広二(平元ギ)

4. 議案第２号

令和元年度事業計画および予算案

(1)令和元年度役員改選案(資料5)
庶務部　山本　潤(平５ギ)

(2)令和元年度事業計画案
幹事長　水田　浩之(昭61ゾ)

(3)第100回(令和元年度)定期総会開催地(函館)について　幹事長　水田　浩之(昭61ゾ)

(4)令和元年度予算案

1.会計部予算案(資料6)
会計部　大西　広二(平元ギ)

2.編集部予算案(資料7)
編集部　工藤　秀明(平３ゾ)

3.組織部予算案(資料8)
組織部　河合　俊郎(平12生)

5. その他

校友会エルム会への北水同窓会名簿情報の提供(資料9)　幹事長　水田　浩之(昭61ゾ)

6. 閉会の辞

副幹事長　岸村　栄毅(昭60化)

■平成30年度 庶務部報告（資料1）

1）新入会員数

海洋生物科学科	４６名
海洋資源科学科	４６名
増殖生命科学科	５２名
資源機能化学科	５０名
大学院（他大学、他学部出身者）	
修　士	５名
博　士	１名
合　計	２００名

2）本年度物故者（平成30年度親潮掲載分）

正・準会員	８５名
名誉、特別会員	１名
合　計	８６名

3）会員現在数（3月10日現在）

正・準会員総数	１５,７９９名
物故正・準会員数	３,４７１名
正・準会員現在数	１２,３２８名
（内準会員数）	（１４名）
特別会員数	７６名
会員数合計	１２,４０４名

4）新入会員を含めた会員現在数（3月15日現在）

合　計　１２,６０４名

■平成30年度　編集部報告

（親潮発行）（資料2）

	号数	発行年月日	全頁数	印刷部数	印刷費	摘要
予算	311号	平30年8月末	本誌　32頁（内カラー7頁）	8,300	970,000	※1
	312号	平31年2月末	本誌　32頁（内カラー7頁）	8,300	970,000	※1
	合計		64	16,600	1,940,000	
決算	311号	平30年8月31日	本誌　40頁（内カラー8頁）	8,300	1,120,500	※1
	312号	平31年2月28日	本誌カラー　24頁（内カラー7頁）	8,300	824,688	※1
	合計		64	16,600	1,945,188	

※1　印刷会社：㈲三和印刷　印刷費には別刷り振替用紙代、消費税を含む

■平成30年度 組織部報告

（名簿会計）（資料3）

	項目	予算額	決算額	摘要
収入	前年度繰越金	210,846	210,846	名簿積立金
	一般会計より繰入	1,200,000	1,200,000	
	受取利子		7	
	合計	1,410,846	1,410,853	
支出	次年度繰越金	1,410,846	1,410,853	
	合計	1,410,846	1,410,853	

（繰越金の内訳　ゆうちょ銀行　1,410,853円）

■平成30年度 会計部報告（資料4）

1）一般会計決算報告

	項目	予算額	決算額	摘要
収入	前年度繰越金	752,314	752,314	
	会費	7,200,000	6,823,500	
	特別会計より繰入	3,000,000	3,000,000	1660名 予算1800名
	親潮広告料	240,000	100,000	
	雑収入	100,000	467,272	
	合計	11,292,314	11,143,086	
支出	親潮印刷費	1,940,000	1,945,188	（資料2）親潮
	通信・運搬費	2,500,000	1,697,793	発送費2回分含む
	総会旅費	700,000	700,000	愛知開催
	組織強化費	700,000	670,000	
	ホームカミングデー経費	150,000	188,000	
	備品費	30,000	29,672	
	消耗品費	180,000	101,683	
	会議費	30,000	30,000	
	振替手数料	180,000	143,281	
	事務嘱託費	2,320,000	2,329,145	
	傭人費	70,000	5,000	
	HP維持費	80,000	73,980	
	雑費	20,000	18,243	
	OA機器整備費	50,000	50,000	積立
	名簿会計へ	1,200,000	1,200,000	（資料3）
	予備費	1,142,314	0	
	次年度繰越金		1,961,101	
	合計	11,292,314	11,143,086	

収支差引額（平成31年度に繰越）1,961,101円
（繰越金の内訳：銀行預金　1,873,821円、現金87,280円）

2）OA機器整備費（積立）決算報告

	項目	予算額	決算額	摘要
収入	前年度繰越金	56,807	56,807	
	一般会計より積立	50,000	50,000	
	合計	106,807	106,807	
支出	無停電装置買替		26,000	
	次年度繰越金	106,807	80,807	
	合計	106,807	106,807	

（繰越金の内訳　ゆうちょ銀行　80,807円）

3）特別会計決算報告

	項目	予算額	決算額	摘要
収入	前年度繰越金	19,316,825	19,316,825	
	定期預金(マリンバンク)利息		1,230	
	合計	19,316,825	19,318,055	
支出	一般会計へ	3,000,000	3,000,000	
	次年度繰越金	16,316,825	16,318,055	
	合計	19,316,825	19,318,055	

○特別会計資産内容

項目	資産額	摘要
郵便定額貯金2口（新規）	8,380,000	
銀行定期預金(マリンバンク)1口	7,938,055	
合計	16,318,055	

第99回 北水同窓会定期総会報告

■会計監査報告

北水同窓会の平成３０年度における会計監査を実施した結果を下記のとおり報告致します。

記

平成３１年３月１３日

１．監査対象期間　　自　平成３０年３月１１日
　　至　平成３１年３月１０日

２．出納簿は、関係書類と対査の結果適正である。
３．現金及び預貯金は、出納簿に照合し適正である。

以上

監　事　河原武則

監　事　清水晋

■令和元年度　役員改選案（資料5）［○は新任］

会　長
横山　清（昭35エ）
名誉会長
木村　暢夫（昭55ギ）
副会長
鈴木賢一（昭36セ）
吉野生壮（〃37ゾ）
樋口達夫（〃50食）
代表理事
安井　肇（昭55ゾ）
学内理事
梶原善之（昭53ギ）
宮澤晴彦（〃53ギ）
尾島孝男（〃54化）
川合祐史（〃55食）
足立伸次（〃55ゾ）
山羽悦郎（〃55ゾ）
工藤　勲（〃57化）
関　秀司（〃57化）
高木省吾（〃58ギ）
都木靖彰（〃59ゾ）
岸村栄毅（〃60化）
向井　徹（〃61ギ）
亀井佳彦（〃61ギ）
水田浩之（〃61ゾ）
宗原弘幸（〃61修ギ）
髙津哲也（〃63ギ）
安藤靖浩（〃63化）
今村　央（〃63ゾ）
大西広二（平元ギ）
坂岡桂一郎（〃元ギ）
高木　力（〃元ギ）
○山村織生（〃元ギ）
田中啓之（〃元化）
丸山英男（〃元化）
澤辺智雄（〃元食）
○細川雅史（〃２食）
○山﨑浩司（〃２食）
○東藤　孝（〃２ゾ）

監　事
河原武則（昭43エ）
清水　晋（〃53ギ）
学外理事
大島栄一（昭30エ）
服部保次郎（〃31エ）
箕田　嵩（〃31ゾ）
高野和則（〃32ゾ）
高島　優（〃33エ）
山﨑文雄（〃33ゾ）
米田義昭（〃34セ）
小祝良介（〃36エ）
大割　了（〃37ギ）
繪面良男（〃37セ）
河村章人（〃37ゾ）
古井恒弘（〃37ゾ）
麦谷泰雄（〃37ゾ）
天下井　清（〃39エ）
菅野泰次（〃39ゾ）
木村　昇（〃40セ）
猪上徳雄（〃41セ）
上平幸好（〃41ゾ）
岸本富男（〃42ギ）
山本勝太郎（〃42ギ）
池田　勉（〃43ゾ）
仲谷一宏（〃43ゾ）
高橋豊美（〃44エ）
工藤昭彦（〃44ゾ）
志賀直信（〃44ゾ）
○山内晧平（〃44ゾ）
三浦汀介（〃45ギ）
三佐川　稔（〃45ギ）
簗田　満（〃45化）
後藤　晃（〃45ゾ）
原　彰彦（〃46ゾ）
中林重雄（〃47ギ）
目黒敏美（〃47ギ）
近江政斗（〃47食）
黒瀬道則（〃47ゾ）

土谷俊一（昭48ギ）
坂本幸造（〃48食）
桜井泰憲（〃48ゾ）
吉田正人（〃48ゾ）
吉野　威（〃49ギ）
飯田浩二（〃51ギ）
平石智徳（〃51ギ）
増田宣泰（〃51化）
矢部　衞（〃51ゾ）
中谷敏邦（〃52ギ）
上野孝雄（〃53ギ）
蛇沼俊二（〃53ギ）
上野久仁夫（〃53化）
備前　悟（〃53化）
広崎淳一（〃55ギ）
正木悦郎（〃55ギ）
宮岡秀昌（〃55ゾ）
西川正一（〃56ギ）
種田貴司（〃56食）
藤田公美（〃57ギ）
小林良一（〃57食）
佐藤友則（〃57食）
学外幹事
阿部純也（昭58ギ）
横山信一（〃58ギ）
佐藤直孝（〃58食）
吉岡武也（〃60食）
今野　伸（〃62食）
宮﨑永司（平元ギ）
柳町琢也（〃４化）
阿部慶太（〃５化）
片岡大介（〃22海生）
島田潤平（〃23増生）
地方理事
（稚内）　風無成一（昭41ギ）
（留萌）　祐川正幸（〃48ゾ）
（紋別）　片岡　靖（〃42ゾ）
（網走）　葛西恭博（〃53ギ）
（根室）　野別貴博（平８ゾ）

(釧路) 穂積 明 (昭40ギ)
(旭川) 斉藤 隆司 (〃46化)
(十勝) ○梶 敏 (〃44ゾ)
(苫小牧) 木村 実 (〃48食)
(室蘭) 矢島 清孝 (〃45食)
(札幌) 林 和明 (〃38ゾ)
(札幌) 眞田 篤弘 (〃43化)
(札幌) 小野寺 勝広 (〃56ギ)
(小樽) 木村 司 (〃61ギ)
(余市) 宇藤 均 (〃45ゾ)
(青森) 佐藤 立治 (〃36エ)
(八戸) ○関川 順悦 (〃55ギ)
(秋田) 遠藤 実 (〃48ゾ)
(村山) 山田 彰一 (〃40ゾ)
(庄内) ○佐藤 洋 (〃54ギ)
(盛岡) 藤本 勝彦 (〃61食)
(宮古) 山本 敬久 (〃62ギ)
(釜石) 高橋 禎 (〃56ゾ)
(仙台) 佐藤 秀雄 (〃42ギ)
(石巻) 小池 幾世 (〃53ギ)
(気仙沼) 千葉 敏朗 (〃46ゾ)

(福島) 江部 健一 (昭53ギ)
(茨城) 山崎 耿二郎 (〃40ゾ)
(栃木) 澤田 守伸 (〃54ゾ)
(埼玉) 吉川 晴二 (〃41ゾ)
(館山) 安田 健治 (〃56食)
(銚子) 寺沢 唯 (平24資機)
(千葉) 佐藤 喜雄 (昭56ゾ)
(東京) 菊本 肇 (〃40ギ)
(神奈川) 金庭 正樹 (〃57化)
(新潟) 宮島 英雄 (〃42ギ)
(長野) 未定
(静岡) 木嶋 武郎 (昭45エ)
(富山) 川崎 賢一 (〃42セ)
(石川) 中道 五郎 (〃39ゾ)
(福井) 大泉 徹 (〃54食)
(愛知) 山口 晧 (〃44エ)
(京都) 近藤 忠裕 (〃54化)
(滋賀) 澤田 宣雄 (〃57ゾ)
(三重) 石川 輝 (平２ゾ)
(大阪) 佐々木 雅人 (昭56化)
(兵庫) 中岸 明彦 (平元ギ)

(和歌山) 丸山 清重 (昭55ゾ)
(鳥取) 山本 栄一 (〃52ゾ)
(岡山) 鈴木 伸一 (〃50ギ)
(広島) 羽原 浩史 (〃55化)
(島根) 児玉 太一 (平12生)
(関門) 萬年 信一 (昭37エ)
(香川) 小野 知足 (〃34ゾ)
(愛媛) 桑原 彰三 (〃53ゾ)
(徳島) 宮本 孝則 (平元ギ)
(高知) 蒲原 幸男 (昭49ギ)
(福岡) 村上 憲男 (昭51ギ)
(佐賀) 高橋 寛昌 (平13海)
(長崎) 渡辺 康憲 (昭51化)
(熊本) 安田 広光 (〃58食)
(大分) 武田 晴美 (〃56ギ)
(宮崎) 未定
(鹿児島) 松岡 達郎 (昭52ギ)
(沖縄) 渡辺 利明 (〃52ゾ)
(韓国) 李 春雨 (平3博ギ)
(中国) 田 元勇 (平22応博)
(北米) ○三浦 明夫 (昭53ゾ)

令和元年度 本部常任幹事直通 電話番号

令和元年度 本部常任幹事直通 電話番号

幹事長	○宮澤 晴彦	(昭53ギ)	(0138)40-8834
副幹事長	岸村 栄毅	(昭60化)	(0138)40-5519
庶務部	丸山 英男	(平元化)	(0138)40-8813
	○高橋 勇樹	(平22海資)	(0138)40-5588
会計部	○東藤 孝	(平２ゾ)	(0138)40-5615
	松野 孝平	(平20海)	(0138)40-5635
編集部	山村 織生	(平元ギ)	(0138)40-8861
	○中屋 光裕	(平11生)	(0138)40-8821
組織部	○今村 央	(昭63ゾ)	(0138)40-5539
	河合 俊郎	(平12生)	(0138)40-8848
事務局	吉田 秀美		(0138)42-3681

■令和元年度 会計部予算案（資料６）

１）一般会計予算案

	項目	予算額	摘要
収入	前年度繰越金	1,961,101	
	会費	7,600,000	1,900名見込み
	親潮広告料	200,000	
	雑収入	100,000	
	合計	9,861,101	
支出	親潮印刷費	2,000,000	(資料７)
	通信・運搬費	2,000,000	親潮発送費(2回分)含む
	総会旅費	100,000	函館開催
	組織強化費	700,000	※
	ホームカミングデー経費	150,000	
	備品費	30,000	
	消耗品費	150,000	
	会議費	30,000	
	振替手数料	180,000	
	事務嘱託費	2,320,000	
	傭人費	50,000	
	HP維持費	80,000	
	雑費	20,000	
	OA機器整備費	50,000	積立
	名簿会計へ	1,200,000	(資料８)
	予備費	801,101	
	合計	9,861,101	

※総会補助30万円、本部役員会補助6万円、卒業祝い品6万円を含む。

２）OA機器整備費（積立）予算案

	項目	予算額	摘要
収入	前年度繰越金	80,807	
	一般会計より積立	50,000	
	合計	130,807	
支出	次年度繰越金	130,807	
	合計	130,807	

３）特別会計予算案

	項目	予算額	摘要
収入	前年度繰越金	16,318,055	
	合計	16,318,055	
支出	次年度繰越金	16,318,055	
	合計	16,318,055	

○特別会計資産内容

項目	資産額	摘要
郵便定額貯金２口	8,380,000	
銀行定期預金(マリンバンク)1口	7,938,055	
合計	16,318,055	

■令和元年度　編集部予算案
（親潮発行）（資料７）

号数	発行年月日（締切り）	全頁数	印刷部数	印刷費	摘要
313号	令和元年8月末（7月10日）	本誌　32頁（内カラー７頁）	8,300	1,000,000	※1
314号	令和2年2月末（1月10日）	本誌　32頁（内カラー７頁）	8,300	1,000,000	※1
	合計	64	16,600	2,000,000	

※1　印刷会社：(有)三和印刷
印刷費には別刷り振替用紙代、消費税を含む。

■令和元年度　組織部予算案
（名簿会計）（資料８）

	項目	予算額	摘要
収入	前年度繰越金	1,410,853	
	一般会計より繰入	1,200,000	名簿積立金
	名簿広告料	1,500,000	
	合計	4,110,853	
支出	名簿印刷費	3,600,000	
	次年度繰越金	510,853	
	合計	4,110,853	

■名簿発行意向調査結果（資料９）

先の親潮（第311号）にて，同窓生の皆さんから名簿発行のご意向を伺いました。
108回答（複数回答有）を頂き下記の結果となりました（平成31年1月31日現在）。

1）今まで通りに印刷体の名簿を発行し、配布した方がよい。……14.8%

2）インターネットで会員情報を検索できれば、印刷体は廃止してよい。……38.0%

3）インターネットで会員検索を検索できれば、印刷体は希望者のみへの配布でよい。……23.1%

4) 印刷体の希望者に配布するのみでよい。（インターネット検索なし）……15.4%

5）印刷体を廃止し、インターネットでの会員検索も必要ない。……3.7%

6）その他
印刷体の希望者に実費で販売する、印刷体とインターネット検索との両方、インターネットで検索できたとしても提供する情報を要望に応じて限定すべき、印刷体の発行は3～5年間隔にする。……4.6%

クラス会
報告

昭和47年増殖学科卒業
第3回同期会

渡辺　一夫（昭47ゾ）

1列目左より
長澤静雄（淡水）、相馬健悦（浮遊）、原口健二（生理）、
佐々木久雄（植物）、中昭成（植物）、水戸啓一（動物）
2列目左より
樋田陽治（鹹水）、石尾敏文（動物）、新谷康二（生理）
3列目左より
渡辺一夫（淡水）、杉本功陽（発生）、斎藤和敏（浮遊）、
大森正明（淡水）、神庭恵（浮遊）、齋藤雅晴（鹹水）

昭和47年増殖学科卒業第3回同期会が令和元年6月16～17日、宮城県白石市白石温泉「薬師の湯」で15名（+1名奥様）出席し、開催されました。我々同期生は、札幌近郊の在住者が昭和61年に卒業後初めて忍路臨海実験所に集まり同期会を行いましたが、東北・関東在住者については、福島県の長澤静雄君の熱心な呼び掛けで、平成14年に初めて仙台に集まり、その後何度か仙台や新潟で開催してきました。時を経て、全体に拡げてやろうとの気運が高まり、北海道在住有志の尽力で待望の全体同期会が平成24年、札幌で開催される運びとなりました。次いで、29年には函館、そして、今回は東北在住者の段取りにより白石での開催となりました。

会は、樋田陽治君の司会進行の下、先ず、同期生38名の中、3名の故人（敦谷幹雄君、新藤稔君、斉藤裕君）のご冥福を祈り黙祷。次いで、佐々木久雄君による開宴の挨拶、大森正明君による乾杯と続きました。近況報告に入ると、いつもは長くなりがちでありますが、司会者の手短にとの注文が重しとなり、意外とスムーズに進み、酒があまり回り過ぎないうちに終了。例によって、各席を回りながらの酒宴が続いたのち、相馬健悦君の中締めにより一次会はお開きとなりました。続いて、幹事部屋にて二次会。ここでは東北在住幹事の方々から持ち込まれた地元の銘酒が振舞われ、学生時代、院生時代、恩師、先輩、東日本大震災のことなど話が尽きず、古稀を迎えた面々ではあるが、美酒の酔いも手伝い、時がたつのを忘れるほどでありました。東日本大震災においては、杉本功陽君は甚大な被害を被った岩手県において、当時、県漁連の専務理事として、被災対応、その後の復興を陣頭指揮し、奔走されました。並大抵のご苦労ではなかったと思います。本当にご苦労様でした。

翌日は、希望者で蔵王のお釜を見学。その前に、宿舎の売店でアカモク入りの温麺などの麺類を購入。実は、佐々木君は宮城県庁在職時、アカモクの魅力に気付いて研究を始め、博士号まで取ると同時にその普及を図るべく尽力している知る人ぞ知る「アカモク博士」。その博士が漁業者など地域への貢献を願い、地元製麺メーカーと協力して作り上げたのがこの麺類なのです。彼に敬意を表し、購入した次第。お土産購入後、いよいよ山形市在住の樋田君の先導で、蔵王に向け出発。つづら折りの山道に入り、途中下車。日本滝百選に選ばれた「三階の滝」を眺望したところで、強風が吹き荒れ、目的地方面を眺めると生憎の厚くて暗い雲。お釜見学は止む無く断念。ただ、樋田君が下見までしてくれた時の写真が後日送られて来まして、散策した気分を味わうことが出来ました。白石まで戻り、新幹線「白石蔵王駅」にて、次回も元気で会おうと、再会を約して散会となりました。

北水同窓会青森支部
平成31年総会・講演会・懇親会報告

山口　伸治（昭49化）

平成最後となる北水同窓会青森支部平成31年総会は、平成31年2月9日（土）午後3時30分から青森市内の「ラ・プラス青い森」にて開催されました。

総会の冒頭、平成30年に逝去されました佐藤志郎

1列目左より
伊藤博夫（昭41ギ）、菅野溥記（昭37ゾ）、又井一宣（昭37ギ）、佐藤立治（昭36エ）、對島簾介（昭59ギ）、福田覚（平15博水産）、渡邉修一（特別会員）、佐々木建一（平6化）
2列目左より
横山勝幸（昭41ゾ）、足助光久（昭40ゾ）、奈良岡修一（昭47ギ）、川村俊一（昭56ギ）、原口健二（昭47ゾ）、松谷起明（平23増生）、松谷ひかり（平23増生）、金澤保（昭56化）、二本柳茂（昭57ギ）、宮部好克（平23資化）、山口伸治（昭49化）
3列目左より
吉田達（平元ゾ）、吉田由孝（昭56ゾ）、伊藤良博（昭53ゾ）、東野敏及（平11生）、工藤敏博（昭56化）、山中崇裕（昭62ゾ）、田澤亮（平16シ）、池田康（昭51ギ）、野呂恭成（昭57ゾ）、小谷健二（平13生）、蝦名　浩（平2ゾ）、竹谷裕平（平13資）

（サトウシロウ・昭24ギ）様、敦澤義一（ツルサワヨシカズ・昭39ゾ）様、山内高博(ヤマウチタカヒロ・昭55ギ)様のご冥福をお祈りして全員で黙祷を捧げました。

次に、對島支部長（昭59ギ）の挨拶の後、平成30年活動報告に引き続き、平成30年収支決算及び平成31年収支予算案が満場一致で承認されまして、金澤副支部長（昭51化）の挨拶で総会終了となりました。

また、昨年から始めた会員による講演会（2年目）は、国立大学法人弘前大学地域戦略研究所准教授の福田覚様（平15博水産）に「地域戦略研究所の近況報告」ということで、地域戦略研究所における地域と連携した地域貢献への取組みについて、具体的には消費拡大と県外産との差別化を目指した商品開発やサーモン養殖実証事業の推進等についてご講演をいただきました。地元のために頑張っている姿勢に一同感心いたしました。

続いて恒例の集合写真を撮影した後、佐藤立治様（昭36エ）の乾杯の発声で賑やかに懇親会が始まりました。31名の参加者一人ひとりからの自己紹介と近況報告を聞きながら、各テーブルでは和気藹々に親しく懇談しておりました。

最後に参加者全員で肩を組みながら、二本柳茂様（昭57ギ）の前口上で「水産放浪歌」を、吉田由孝（昭56ゾ）の前口上で「都ぞ弥生」を大合唱した後、池田康副支部長（昭51ギ）の力強い三本締めと筆者の万歳三唱で懇親会は終了となりました。平成31年総会にご参加いただきました会員の方々に役員一同心から感謝申し上げるとともに、来年もより多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

昭55卒 プチ同窓会in京都

十時　理祐（昭55ギ）

左から
河岸賢（京都府）、山橋充典（富山県）、高橋誠（東京都）、長尾貞良（大阪府）、十時理祐（奈良県）、山本藤郎（宮城県）、内林善彦（滋賀県）、小沼敦（東京都）

平成31年3月9日、10日に関西在住の昭和55年卒業生有志による「プチ同窓会in京都」が開催されました。かねてより世話人の十時が同窓生と会う度に「一度、少人数の同窓会をやろうや」と言っていたものが、ようやく実施の運びとなったものです。関西のみならず、富山、東京、仙台からも総員8名が京都に集結しました。

会場は京都駅からタクシーでワンメーターの位置にある旅館「緑風荘」。東西の本願寺の近くです。なにしろ「会うのは卒業以来」という出席者同士が多いので、「浴衣姿で一晩中でも語り合える」場所の設定としました。

チェックインは16時。早い目にやって来た者同士から当時の話に花が咲きます。そして18時から懇親会。乾杯すると、近くに座った者同士からお喋りが始まりました。しばらくしたら一人ずつ「卒業してから今日までの歩み」のスピーチとなりました。その間にも質問と冷やかしの言葉が飛び出します。例えば教員生活を送ってきた内林君には「ところで奥さんは教え子か？それはあかんやろ」という具合に。

宴会終了後、客室に戻っての二次会です。話は尽きることがありません。「当時の写真や小物があれば持って来て」と予め伝えてあったところ、山橋君が「中島みゆき文化祭コンサート」のポスターを持ってきました。「これ程メジャーな歌手になるとは。もっとじっくり観ておくんだった」とは全員の一致した意見でした。

夜も更けてきて、一人が寝、二人目が寝、しているうちに「自然終了」となりました。翌朝、「二年後位に場所を変えて、PartⅡをしませんか？」と提案すると、「一年後にやれ」との声多数。幹事に宿題ができました。

北水同窓会大阪府支部
令和元年度新卒歓迎会報告

大橋　人司（昭56ギ）

6月15日 北大関西同窓生の活動拠点である、北大会館にて本年度の新卒社会人歓迎会を開催した。

新卒社会人は、赤穂那海（平29海洋生物、平31院）、須藤頌大（平29資源科学、平31院）、岸本早貴（平29海洋生物、平31院）の三名が参加、旧卒出席者は、上田　稔（昭45化）、入江和彦（昭45ギ）、田中文夫（昭50食）、大村泰治（昭51食）、佐々木雅人（昭56化）、大橋人司（昭56ギ）、中田邦彦（昭61食）、渡辺英来（平2ゾ）、吉村直孝（平3ゾ）、山下正晶（平3ゾ）、櫻井遥平（平19生）、岡田佑太（平20生）、岡田初美（平20生）の13名、加えて岡田さん夫妻の５歳と２歳の可愛いお子さんも参加し、賑やかな会となった。

佐々木支部長から歓迎の挨拶と乾杯の音頭の後、新卒の三名から自己紹介が始まり、須藤君は食品メーカー勤務、出身は石川県、赤穂さんは機械設計

メーカー勤務、大阪出身、岸本さんは県庁勤務、大阪出身とのことであった。続いて旧卒生の自己紹介となったが、新卒生三名の参加がうれしく、また初々しい卒業生と接する機会も多くはないので、何か新卒生の力になりたい思いからか自己紹介がついつい長くなり、まわりから、“巻き”が入る場面もあった。北大関西同窓会の入江副会長からは、北大会館の成り立ちと北水大阪府支部の事務所として月例会等で利用していることの説明があり、新卒の方々も大いに利用してもらいたいとの話であった。その後の、酒を酌み交わしての宴会では、出身講座関係のアカデミックな話あり、忍路丸での実習の話あり、お世話になった教授の方々の話、等々で大いに盛り上がり一同幸せなひと時を過ごすことができた。また兵庫県支部から参加の岡田夫妻の二人のお子さんには、旧卒生には新しい孫ができたようで各自相好が下がりっぱなしであった。２時間を超える歓迎会の最後には、「都ぞ弥生」「水産放浪歌」を全員で熱唱しお開きとなった。

北水同窓会石川県支部懇談会開催

福嶋　　稔（昭62ギ）

平成30年10月27日（土）午後6時半から、北水同窓会石川県支部懇談会が石川県水産会館内の漁協直営かがのと海鮮処「旬魚亭」にて開催されました。

中道支部長の挨拶で開宴し、参加者13名の自己紹介と近況報告などで宴席は大きく盛り上がりました。

特に今回は20代の若い会員に多く参加していただき、「校歌を歌ったことがない」など大きな世代間ギャップはあったものの、諸先輩のリードで、最後は全員で校歌を合唱し楽しく歓談することができました。

また、中道支部長より体調面などから支部長をどなたかにお願いできないかとの発言があり、諸先輩でご協議いただいた結果、池田裕司氏(昭49ゾ)に支部長を引き受けていただくことになりました。

前列左より
魚住昭文（昭52ゾ）、池田裕司（昭49ゾ）、中道五郎（昭39ゾ）、高橋稔彦（昭39ゾ）、河崎浩（昭55化）
2列目左より
河田麻帆（平23資化）、室田承吾（昭61ギ）、福嶋稔（昭62ギ）、沢田浩二（平3ゾ）
3列目左より
中川宙飛（平23海生）、川畑達（平27海生）、福間健（平24増生）、山内和成（平30資化）

※カメラの能力が低く光力不足でご容赦ください。

北水同窓会小樽支部総会

木村　勇基（平25資化）

前列左より
小笠原惇六（昭38エ）、木村　司（昭61ギ）、三春清貴（昭58食）、山本　貞 夫（昭46化）
2列目左より
大田道代（平3ゾ）、梅崎真大（平10ギ）、大見佳明（平11化）、三宅教平（平16生）
3列目左より
小田一夫（昭45ギ）、磯谷揚一（昭49ゾ）、片桐尉晶（平2ギ）、山本洋一（平2ギ）、島田英憲（平26海生）、平山　聡（昭54ギ）、大野　肇（昭55ギ）、木村勇基（平25資化）

平成31年2月15日（金）18時より、「日本橋」において平成30年度小樽支部総会および懇親会が開催されました。総会では今年度をもってご勇退される鎌田和幸（昭58化）副支部長の後任として、三春清貴（昭58食）新副支部長の就任等が審議され、参加者の皆様にご承認いただきました。総会の後には懇親会が行われ、ご参加いただいた16人お一人ずつからスピーチいただくなどおおいに盛り上がり、2時間があっという間に感じられる楽しい酒宴となりました。会の最後は参加者で最も先輩である小笠原惇六さん（昭38エ）の乾杯により閉会となりました。来年度も数多くの会員の皆様のご参加をお待ちしています。

書評

クジラ博士のフィールド戦記

加藤　秀弘（昭50ゾ）著
光文社新書（2019年5月20日初版）、285頁
840円+税

桜井　泰憲（昭48ゾ）

著者からは、これまでにも何冊ものクジラに関する著書をいただいているが、受け取って一気に読破したのは初めて。彼の洒落と機知に富み、人間性溢れる文章の魔術にすっかり魅せられてしまった。著者とは、1970年代半ばから北大水産学部付属北洋水産研究施設（通称北洋研の漁業部門、現在は資源生態学講座）に、ほぼ同じ時期に研究と飲食を共にした仲間である。当時は、わが国の海洋生態学の先駆者である辻田時美先生（昭12ヨ）、三島清吉先生（昭19エ）、島崎健二先生（昭33エ）、西山恒夫先生（昭34 ゾ）のもとで、海鳥、鯨類、鰭脚類、サケ類、浮魚・底魚類、イカ類、衛星海洋などの亜寒帯海域（北洋）の海洋生態研究の黎明期、そして200カイリ経済水域設定前後の激動の時代でもあった。

著者が著名な「クジラ博士」であることは周知の事実だが、アザラシ類とトドなどの鰭脚類研究の先鞭者であったことは、意外と知られていないのでは。神奈川県の県立高校から北大に憧れて「しょっぱい川・津軽海峡」を渡り、教養時代は恵迪寮でバンカラ生活、そして年次寮歌まで作詞している。やがて函館の水産学部に移行し、ある日えりも岬を訪れ岩礁上のゼニガタアザラシに初めて出会った。まずは、アザラシの餌の魚を学ぶためにと水産動物学研究室に、そして学部からはみ出た研究をしたい若者が集まる北洋研へ。北大出身の1960年代安保闘争時の全共闘委員長・唐牛健太郎氏も「賄い」として乗船していた紋別のトッカリ船（オホーツク海の流氷の中でアザラシを捕獲する小型母船）に、氏と入れ違いに著者自身が乗り込んでの人とアザラシとの奮闘、そして噴火湾沿岸に越冬回遊するトドの研究への転身も、本書に活描されている。著者が先駆けた鰭脚類研究にはその後多くの若者が集い、研究者として巣立って行った。そしてその流れは今も続いている。

本著に書かれていない余談を一つ。1970年代半ばのこと、当時五稜郭に100人以上が収容可能なジンギスカン食べ放題の店があった。皆が、ジンギスカンと生ビールを楽しんでいる最中、密かにトドの生肉を我が北洋研グループが鍋に載せた瞬間、ホール内のラム肉を焼く“香しい匂い”が一気に“海獣（ケモノ）の臭い”に変身した。我々は周りをみることなく飲食と懇談を続けた。

鰭脚類研究の後は、大型クジラ類の研究へと方向を大展開した今のクジラ博士・加藤秀弘氏がいる。この著書には、鯨類研究所、遠洋水産研究所、最後には東京海洋大学教授として2018年3月末に退職するまでのクジラ研究、そしてIWC（国際捕鯨委員会）での科学委員会での奮闘記、日本が2019年7月1日にIWCを脱退するまでの経緯が淡々と書かれているだけに、心打たれる。文末には、「個人的な切望ではあるが、IWCに変貌の兆しが見えた時には、是非再加盟を検討して欲しい。筆者には、日本が脱退したIWCの将来にも、言いしれぬ不安が感じてならないからである」と締めくくっている。加藤氏が再びIWCの舞台で活躍できることを切に願ってやまない。最後に、大学院時代から、「加藤氏の話の半分は本物、あとは？」と揶揄した私からは、本著に書ききれていない著者の「残り半分」の続編を期待したい。

寄稿

追憶の臼尻トド調査

加藤　秀弘（昭50ゾ）

平成30年2月の紋別国際シンポジウム「オホーツク海と流氷」にて、北海道東海大の西山恒夫先生のご配慮により一般向け講話の機会を戴き、もう40年以上も前になる、オホーツク海での母船式アザラシ猟の乗船記を披露させて戴いた。時は200海里排他的経済水域設定直前の1976年、まさに紋別港から初めてのアザラシ猟に出かけ、当方の海獣学事始めとなった。その講演準備の段階で、茶色く変色しカビが生えたようなフィールドノートを掘り起こし、記憶を辿ってみた。すると、自分でも感心するほど、当時の記憶が昨日のことのように蘇り、自己満足かも知れぬが、まずまず無難に講話を終えた（と思えた）。

当方は昭和50年に水産増殖学科を卒業、一年間の研究生生活を経て、北洋水産研究施設（北洋研）にて大学院生生活を送った。当時水産学部には海獣類が御専門の教官はいらっしゃらなかったが、何かに憑かれたように強引に海獣類を始めさせて戴き、周囲の先生方を困らせたものだった。

その後、いろいろな事があり海獣類研究から鯨類研究に転進。幸運にも職を得て、旧(財)鯨類研究所、水産庁遠洋水産研究所を経て、平成18年に東京海洋大学海洋科学部（旧・東京水産大学）に転出し、平成30年3月に退任した。この間実に様々なフィールドを転戦し、まあ何と言うか、研究教育生活の卒業論文のような新書を書かせて戴いた（光文社新書#1008・クジラ博士のフィールド戦記）。この推敲過程で、アザラシとクジラをつないだ噴火湾のトド研究時代にも改めて思いを馳せることになった。

トド（アシカ科トド属）は千島列島やサハリン周辺の島嶼に繁殖場があり、晩冬期から初春期に流氷に押されるように北海道の周囲に南下回遊してくる。当方がトドを専攻した昭和51年から53年あたりにかけては、現在ではほぼトドが消え去った噴火湾にも盛んにトドが来遊していた。実質的にトド研究を指導していただいていた岐阜歯科大学（現・朝日大学）の伊藤徹魯先生（故人）と海域を分担して（と言うほど格好良いものではなかったが）調査にあたっていた。伊藤先生は利尻礼文島海域から積丹にかけての広大な海域を担当し、当方は噴火湾を担当とすることになった。

当時のトド調査は、広域を船舶で調査するようなものではなく、トドハンターのお宅を訪ねまわって標本や情報を頂戴する“御用聞き”スタイルで、機動の力の無かった当時の当方には極めてしんどい作業だった。足で稼いだ情報収集の結果、やがて南茅部町の大船集落に鹿部町も含めた一帯のハンターが集結してトド小屋を結成している事が分かった。そこで、北洋研の島崎健二先生（故人）のお勧めにより臼尻水産実験所に拠点（と言うか橋頭堡）を置かせて頂き、そこから大船双見のトド小屋に通った。そこで、ハンターの皆さんに加えてもらい、お手伝いの様なこともしながら、トドの頭骨や内容物の詰まった胃袋を集めたりした。しかし、臼尻に拠点があると言っても、日々の人間以上にサンプルの移動は楽ではなかった。とりわけ、ときには60キロにも迫る大きな胃袋の運搬はへとへとだった。重い胃袋を実験棟の運び上げたときにはどっと疲れが押し寄せた。それでも、肩身の狭い思いで、野外やら水産資料館の片隅で胃袋を開いていた水産学部内とは違い、フォルマリンで固定していない胃内容物観察は、極めて快適だった。きっと、山本先生、嵐田さん、野村さんには多大な大変なご迷惑をおかけしたのだと思うが、非常に実のあるフィールド戦になり、システムアップされた後の鯨類研究フィールドでは、ある意

図1.旧南茅部町、大船双見にあったトド小屋。入り口左脇に、当時の主流猟銃であった12番口径散弾銃が見える。

図2. トド小屋下の前浜でのトド解体風景。中央のヤッケが筆者、背を向けているカッパ姿が当時京大霊長類研の和田一雄先生、左端が国立科学博物館の町田昌昭先生。

味大いに役立った。

臼尻水産実験場のある弁天島からトド小屋のあった双見まではおよそ8km、機動力の無かった当方がどのようにして小屋まで通ったのか?どうも判然としない。先生や院生の方に車で送ってもらった事もあったし、ハンターの鎌田さんや鈴木さんに送ってもらったこともあったし、自転車でリヤカーを曳いたこともあったし、歩いて帰った事もあった。また、ある時には、懇意になったハンター連が、トドをトラックに乗せて函館キャンパスまで運んできてくれたことには、辻田時美先生以下北洋研の諸先生、先輩同僚諸兄驚かれておられた。、特に、平常では何事にも動じない同級生の吉田英雄君の驚いた顔も忘れられない。

当時院生だった、桜井泰憲先生にはとりわけお世話になった。桜井先生は、水産動物学講座の岡田雋先生(故人)から譲り受けた(?)と言う有名な灰色のパブリカ・バンに乗っておられ、マイカー所持率の低かった当時では皆の羨望の的であった。ある年の早春に、そのパブリカバンで、島崎先生も同乗しつつトド調査物資を積み臼尻に向かった。川汲温泉あたりで休息しつつ、臼尻港内の弁天島へのアプローチロードにさしかかったあたりで、ふと右側を見ると何とタイヤが一本コロコロと転がってゆくではないか!助手席の島崎先生も見つけたようで、「抜けたんでねべか? 」とおっしゃったような・・・気がする。それでも桜井先生は平然と運転を続けられ、暫くの間はパブリカバンは(おそらく三輪で)正常(?)走行を続けていた・・ような気がする。その平然さが何とも桜井先生らしかったが、その事後処理の大変さについては、記憶中枢がそれ以上先に進めてくれず、どうにも思い出せない。

当方の臼尻生活は決して長いものではなく、僅か2シーズンで終了し、以後(大学院も博士二年で中退し)長い長い鯨類フィールドに移行した。学部から修士課程のアザラシ時代では比較的明確な内的インパクトがあるが、トド時代はまるで霞がかかったようで、まるで遙か彼方に夢を観る様な心持ちである。当時の諸先生、諸先輩にお礼を申し上げると共に、臼尻水産実験所のさらなる発展を祈念したい。

図3. トドの胃内容物、ホテイウオ。量があまりに多いときは、こうして現地で一次分析した。

新刊案内

高井保秀君（昭50ギ）による新刊図書の御案内

真鍋　康利（昭52ギ）

暑い日が続いています。毎日、お忙しくお過ごしと思いますが、熱中症にはくれぐれもご注意いただきますようお祈りしています。さて、今回は、この度でき上った書籍「瑠美子、君がいたから―二人で歩んだ人生ノート」をご紹介させていただきます。北大水産学部の友人・高井保秀君が、昨年2月に最愛の奥様を亡くされました。子供のいない夫婦で、とても仲の良い二人でしたので、彼の落ち込みは非常に大きく、後を追うのではないかなど心配する友人もいたほどです。しかし、昨年後半になって少し元気を取り戻したようで、現在住んでいる千葉から北海道に出てきました。学生時代のラグビー部の友人らに会うためです。その合間に小生にも会いたいとの連絡を受けました。いつも「悠悠と。」を読んでくれている男で、その胸中を慮ると、気軽に昔仲間に会うという感じにはなりませんでしたが、久しぶりに会って、いろいろな話を聞きました。

肺腺がんが脳に転移し、がん性髄膜炎となった妻。二人で病いに立ち向かい、考えうるあらゆる手立てを講じましたが、残念な結果となってしまいました。そのさ中、彼はいま直面することを記録するのが自分の使命ではないかとの考えに至り、日々の出来事、医療・看護の様子を克明に記録したそうです。発症が判明した際、患者や家族がどう向き合えばいいのか参考となる情報がないかとインターネットで探したが、見つけることができませんでした。そこで、彼から、ほとんど病室で書いた手記を本にしたい、手を貸してほしいと求められたのです。現在同じような病気でお困りの患者さんやご家族の方々にこの本が届き、少しでもお役に立てたら幸いだと言います。

過去、弊社も書籍の出版実績はありますが、書籍の流通に乗せるには力不足です。そこで「悠悠と。」でコラムを書いてくださっている和田由美さんの亜璃西社さんから出版してもらうことにしました。小生は出版コーディネーターとして、彼の原稿の構成・編集・校正などを担当しました。お忙しいとは存じますが、ご一読いただければ幸いです。主な書店の店頭に並ぶと思いますが、もしなければ取り寄せの手配をしていただけませんか。もちろんネット書店でも取り扱っています。344ページにおよぶ大作です。小生はほぼ半年近くこれにかかっていました。良い本ができたと思っています。一人でも多くに方にお読みいただき、いろいろな方にこの本の情報が届くよう願っております。亡くなる直前の緩和ケア病棟での233日間の入院生活、彼はその間病室で寝泊まりしたそうです。そんな彼の願いをかなえることができますよう小生は精一杯取り組む所存です。

以上どうぞよろしくお願いいたします。暑い日がまだまだ続きそうです。どうぞご自愛ください。

書　名　**瑠美子、君がいたから――**
二人で歩んだ人生ノート
著　者　**高井保秀** [たかい・やすひで]
定　価　税込**1,620円**
出版社　**亜璃西社**（札幌市）
ISBN 978-4-906740-38-3C0095

内容　肺腺がん（肺がんの一種）が脳へ転移し「がん性髄膜炎」となった妻。そこから始まった、緩和ケア病棟での233日間におよぶ孤独な闘い　――。患者や患者の家族が知りたい、症例の少ない「がん性髄膜炎」の病状を克明に記録するとともに、最愛の人との出会いから看取りまでを綴った、亡き妻への鎮魂歌。

著者プロフィール
1952年大阪生まれ。北海道大学水産学部卒（恵迪寮出身）。食品輸入商社で国内営業・外食事業部・総務人事部を経て取締役に就任。妻のがん発病を機に61歳で退任し、二人で闘病生活を歩んだ。本書は、大学の同期生である出版コーディネーターの尽力で刊行に漕ぎつけた。

□学位取得者【平成30年9月取得】

黒田　実加	小型ハクジラ類の頭部発音器官におけるクリックスの伝搬経路と周波数帯域決定過程の音響学的検討
流石　啓司	産業廃棄物の有効利用に向けた廃棄養殖ノリからの高品質寒天の抽出と応用に関する研究

□学位取得者【平成31年3月取得】

呂　　振	音響的手法を用いた仔稚魚及び動物プランクトンを対象とした曳網採集具の採集効率の推定に関する研究
松原　直人	鳴音計測による北海道沿岸性底魚類の資源・生態情報の把握に関する研究
上村麻梨子	スフィンゴイド塩基の抗酸化機構とその応用
永田　　淳	Studies on molecular mechanisms underlying regulation of hepatic estrogen-responsive genes in cutthroat trout, *Oncorhynchus clarki* （カットスロートトラウト肝臓におけるエストロジェン応答性遺伝子の発現調節機構に関する研究）
西川翔太郎	ニジマスのウイルス感染時およびpolyriboinosinic-polyribocytidylic acid (PIC) 投与時における血中タンパク質の発現変動に関する研究
西山　竜士	*Flavobacterium* sp. UMI-01株のアルギン酸分解および代謝機構の解明
劉　　少凱	Dietary Effect of Squalene and Farnesol on the Lipid Metabolism of Obese/diabetes KK-A^y Mice and Wild-type C57BL/6J Mice （肥満／糖尿病KK-Ayマウスと野生型C57BL/6Jマウスの脂質代謝に及ぼすスクワレンとファルネソールの効果）

食中毒検査なら信頼と実績の中山薬品商会へ　一検体@1,000円～承ります。
NAKAYAMA MEDICINES CO. LTD
株式会社 中山薬品商会
代表取締役　中　山　一　郎
本　　社　〒040-0075　函館市万代町20番10号　PHONE (0138) 40-6275・FAX40-3939
釧路営業所　〒084-0903　釧路市昭和町2丁目15番地3　PHONE (0154) 52-4101・FAX52-4103
札幌出張所　〒065-0031　札幌市北3条東19丁目6番14号　PHONE (011) 299-5493・FAX299-5493
http://nakayamayakuhin.jp

□平成30年度　卒業者（学部）・修了者（修士・博士）の就職先一覧

学 部

NECソリューションイノベータ／秋田県庁／イオンリテール㈱／オープンリソース㈱／㈱アシスト北海道／㈱アルファ水工コンサルタンツ
㈱ジャパンテクニカルソフトウェア／㈱セコマ／㈱ソフトバリー／㈱東京かねふく／㈱ニトリ／㈱八十二銀行／㈱明電舎／㈱読売広告社
㈱河合塾進学研究社／クシダ工業㈱／札幌市役所／水産庁／道内高校教員（水産）／豊田通商㈱／長野市役所／日本年金機構
函館市役所／函館地方検察庁／ピー・シー・エー㈱／兵庫県警察／富士通㈱／法務省（保護観察官）／ホクレン農業協同組合連合会
北海道庁／マルハニチロ㈱／三井物産㈱／六花亭製菓㈱／㈱エヌ・ティ・ティ・データ／㈱日本旅行北海道
鴨川シーワールド（㈱グランビスタ ホテル＆リゾート）／生活協同組合コープこうべ／日伸産業㈱／日鉄住金環境㈱／日本甜菜製糖㈱
北海道漁業協同組合連合会

修 士

WDB㈱エウレカ社／アパホテル㈱／一般財団法人 日本海事検定協会／今治造船㈱／岩谷産業㈱／エイツーヘルスケア㈱
小樽商科大学（事務系）／オリエンタル酵母工業㈱／オリンパス㈱／㈱資生堂／㈱NJS／㈱イノベーティブ・ソリューションズ
㈱エイチ・アイ・ディ／㈱紀文食品／㈱商船三井／㈱ソフトウエア・サイエンス／㈱長大／㈱東京かねふく／㈱ニチレイフーズ
㈱日本経済新聞社／㈱日立ソリューションズ・クリエイト／㈱明治／㈱リクルートマネジメントソリューションズ／京都府立海洋高校
キリンホールディングス㈱／厚生労働省神奈川労働局／サノヤス造船㈱／三生医薬㈱／サントリー食品インターナショナル㈱
サントリーホールディングス㈱／資生堂ジャパン㈱／ジャパンマリンユナイテッド㈱／荏原実業㈱／スクレッティング㈱
全国漁業協同組合連合会／第一稀元素化学工業㈱／第一生命保険㈱／太平洋セメント㈱／タカラバイオ㈱／中部飼料㈱
東芝デジタルソリューションズ㈱／東洋技研コンサルタント㈱／独立行政法人 北海道立総合研究機構／日産自動車㈱／日本製粉㈱
日本製紙木材㈱／日本たばこ産業㈱／日本電気㈱／日本ピュアフード㈱／ハーゲンダッツ ジャパン㈱／兵庫県庁（水産）／富士通㈱
フジッコ㈱／北海道ガス㈱／北海道庁／北海道糖業㈱／マイクロンメモリジャパン合同会社／三重県庁（水産）／三菱自動車工業㈱
三菱スペース・ソフトウエア㈱／三菱電機㈱／森永乳業㈱／文部科学省／よつ葉乳業㈱／ロート製薬㈱／㈱グランマルシェ／㈱セコマ
㈱チャーム／㈱ニトリ／㈱庄福丸／㈱堀場製作所／㈱鈴廣蒲鉾本店／東洋ゴム工業㈱／日本アイ・ビー・エム㈱／日本製紙㈱
富士通㈱

博 士

国立研究開発法人水産研究・教育機構／東レ㈱／独立行政法人北海道立総合研究機構／日本学術振興会（博士研究員PD）

会員死亡通知

佐藤　義信	(昭17セ)	平成30年 8月21日	小樽支部様より
山岸　保雄	(昭19セ)	平成30年 9月30日	ご家族様より
角井　幸義	(昭20ゾ)	平成30年 2月 2日	青森県支部様より
工藤　譲次	(昭22セ)	平成30年 7月	工藤　糾夫(昭32セ)様より
寺坂　登	(昭23セ)	平成30年 6月	ご家族様より
佐藤　志郎	(昭24ギ)	平成30年 2月 9日	青森県支部様より
菅原　一郎	(昭24ギ)	平成30年 4月10日	ご家族様より
金谷佳代士	(昭25ギ)	平成31年 1月29日	小沢　道昭(昭25教ギ)様より
永沼　博文	(昭25エ)	平成31年 2月17日	ご家族様より
若生　允	(昭25エ)	平成30年12月 1日	ご家族様より
渡邊　一	(昭25エ)	平成26年 4月15日	ご家族様より
斉藤　誠一	(昭25セ)	平成31年 1月31日	下河原　修(昭25セ)様より
杉本　昌也	(昭25セ)	平成30年11月	ご家族様より
坂井　英世	(昭26ゾ)	令和元年 5月 2日	ご家族様より
小松　重厚	(昭28セ)	平成30年12月23日	ご家族様より
坂本　有隣	(昭29エ)	平成31年 2月15日	米田国三郎(昭40エ)様より
小高　洋	(昭29ゾ)	平成30年10月26日	ご家族様より
谷口　坦	(昭30ギ)	平成27年 8月	ご家族様より
中根　重勝	(昭30エ)	平成31年 4月26日	ご家族様より
藤田　龍四	(昭30エ)	不詳	ご家族様より
浅野　信二	(昭30セ)	令和元年 6月 4日	ご家族様より
小西　亮	(昭30セ)	平成27年12月15日	ご家族様より
中野　司朗	(昭32エ)	平成31年 4月 9日	今井　輝(昭32ゾ)様より
武藤　瑛	(昭32エ)	平成30年10月13日	ご家族様より
草島　充弘	(昭34ゾ)	平成31年 1月20日	大橋　信英(昭34セ)様より
新田　寛	(昭35エ)	平成31年 3月13日	齋藤　毅(昭36ギ)様より
川村　厳	(昭36セ)	平成25年頃	浅倉　建治(昭36セ)様より
稲葉　厚	(昭36ゾ)	平成23年 1月	浅倉　建治(昭36セ)様より
西本　健市	(昭37セ)	平成30年12月17日	ご家族様より
土屋　久男	(昭38ゾ)	平成31年 4月 2日	柴田　勇夫(昭39ゾ)様より
橋本　宏之	(昭39セ)	平成31年 3月22日	ご家族様より
敦沢　義一	(昭39ゾ)	平成30年 3月19日	青森県支部様より
冬木　興	(昭40ギ)	平成31年 1月27日	ご家族様より
高橋　英勝	(昭42セ)	平成31年 2月18日	城戸　勝利(昭43化)様より
牧野　哲三	(昭42セ)	平成31年 3月 8日	四方　純(昭43食)様より
西村　修	(昭49化)	平成31年 4月 2日	品川　高儀(昭49化)様より
片山　広志	(昭49食)	平成31年 1月 5日	ご家族様より
藤田　寿	(昭53ギ)	平成30年 3月15日	飯塚　正(昭56ギ)様より
藤田　重志	(昭53化)	令和元年 5月24日	十勝支部様より
山科美奈子	(昭57食)	平成31年 4月 5日	ご家族様より
加島　徹	(昭61化)	平成30年12月 9日	ご家族様より

親潮投稿規定

【寄稿、支部・会員便り、会員の受賞、ご案内など】

一つの投稿につきA4版・1ページ（2000字程度）までとする。この制限以上の長文あるいは連載を希望される場合は2号分までとする。写真を入れる場合、その分の文字数が減る。また写真はホームページに掲載することもできる。原稿は、同窓会宛に封書で郵送するか、同窓会のメール宛に送付することとする。

【同窓生の声】

各種活動や出版物の告知・紹介、本誌への感想など。個人的な連絡は対象とせず、1記事につき300字以内。同窓会あてのメール(hokusuialumni@gmail.com) にて受け付けます。写真は入れられません。

[編 集 後 記]

前号から引き続き編集を担当しておりましたが、本号を無事お届けすることができホッとしております。特集では臼尻実験所の竣工をとりあげました。学部~院生時代の大先輩で頭の上がらない宗原先生に御無理を申し上げ、引っ越しと臨海実習で超ご多忙のなか、実験所の設置から新規改築に至る経緯を記して戴きました。どうもありがとうございました。また、今号で御著書が紹介されている加藤先生には、「臼尻つながり」で昔日の界隈での調査の様子を描いて戴きました。いっぽう、前号の特集で御紹介できなかった学部所属の若手の先生がたを今号で、と考えていたのですが紙幅が尽き叶いませんでした。申し訳ありません。たいへん心残りですが次号以降の担当に引き継ぎたいと思います。

なお紙面でも御案内いたしましたように、9月28日（土）14時より本学札幌キャンパス学術交流会館にて、「水産学部卒業生・在校生の集い」（ホームカミングデイ）および懇親会が開催されます。近郊にお住まいの方々、またそうでない皆さまも奮って御参加をお願い申し上げます。詳しくは同窓会ウェブサイトhttp://Hokusui.net/)を御参照下さいませ。

次号（通算314号）の原稿の締め切りは、2019年11月20日とさせていただきます。寄稿につきましては、郵送もしくは電子メール (hokusuialumni@gmail.com) にて受け付けております。支部報告や同期会報告、著者の紹介など、多くの原稿をご投稿下さいますようお願い申し上げます。また、親潮では同窓の方々の交流形態として「同窓生の声」の広場を設けております。また、同窓会誌に対するご意見やご感想などを募集しております。詳しくは上欄に掲載しております投稿規定をご参照ください。また、支部総会や同期会の開催時の写真や開催案内を同窓会ウェブサイトにて掲載しておりますので、是非ご覧ください。

編集幹事／山村 織生（平元ギ）

令和元年8月発行

北 水 同 窓 会

〒041-8611 函館市港町3-1-1

TEL & FAX.0138-42-3681

E-mail：hokusuialumni@gmail.com

株式会社 釣八（つるはち）

URL http://www.tsuru8.co.jp/

よく間違えられますが、「つるはち」って読みます。
社長の名前が「つるみ」だから。
世界中の海から、イカ、赤魚、サバ等なじみのある水産物を、
いま、求められるかたちにして、お届けできるように奮闘努力刻苦勉励

代表取締役社長　釣見 泰之（昭和59年 漁業学科卒）

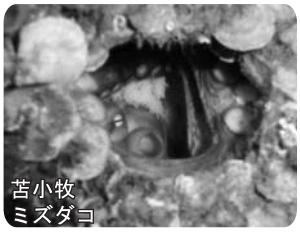
【水産学部卒業社員】 土井 倫行（昭和60年卒）　奥田 和人（昭和60年卒）

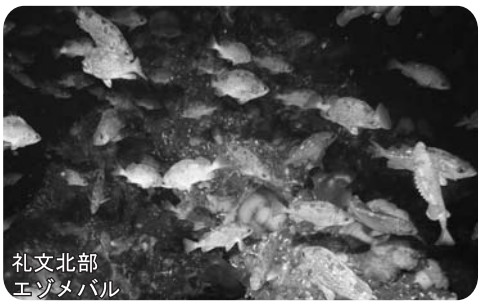
本社　〒104-0042　東京都中央区入船3-8-7　ザ・ロワイヤルビル2F
TEL03-3297-8883　FAX03-3297-8885

八戸支店	〒031-0082	青森県八戸市常海町13-2　サンデュエル内丸1203	TEL 0178-71-3488
銚子支店	〒288-0051	千葉県銚子市飯沼町186-93　八木友ビル2F	TEL 0479-25-8822
大阪支店	〒550-0015	大阪府大阪市西区南堀江3-14-12　イイダビル2-2A	TEL 06-6532-8886
福岡支店	〒812-0011	福岡県福岡市博多区博多駅前3-18-28　フクオカビル7F	TEL 092-401-8828

関連会社　築地：（株）釣十（マグロ仲卸）　中国：大連釣八（水産物加工）
アメリカ・ロスアンジェルス：フィッシングエイト　タイ・バンコク：釣八タイランド

函館住吉
ウスメバル


苫小牧
ミズダコ

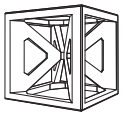

礼文北部
エゾメバル

人工魚礁による水産資源の保護・増殖に貢献します

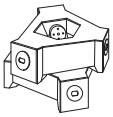
海洋土木株式会社

〒142-0043　東京都品川区二葉２－１１－５

代表取締役 木實谷浩史（54ゾ）　青森営業所長 山口伸治（49化）
取締役副社長 石井直志（49ゾ）　北陸営業所長 魚住昭文（52ギ）
専務取締役 幡宮輝雄（57ギ）　札幌支店部長 日和久典（平6ギ）


ＦＰ魚礁

カルベース付き
ＦＰ１.５Ｇ


オクトム

函館竹田　食卓に函館の味を

HACCP

株式会社
竹田食品

代表取締役　竹田寿広

本社工場　函館市浅野町３番10号
TEL（0138）43－1110（代）　FAX（0138）43－1113

札幌営業所　札幌市中央区北13条西19丁目1番1号
（水産保冷配送センター 3F）
TEL（011）623－0990　FAX（011）644－9910

竹田食品販売㈱　東京都中央区築地７丁目５番３号（紀文第一ビル２階）
TEL（03）6226－6820　FAX（03）3545－2135

竹田食品販売㈱ 大阪営業所　大阪府大阪市淀川区西中島４丁目３番５号
（NLCセントラルビル５階）
TEL（06）6307－5311　FAX（06）6307－5358

交通事故、労働災害、医療過誤、倒産、債務整理、サラ金破産
個人再生、未払い残業代請求、離婚、相続、遺言、成年後見

相談料は全て無料です

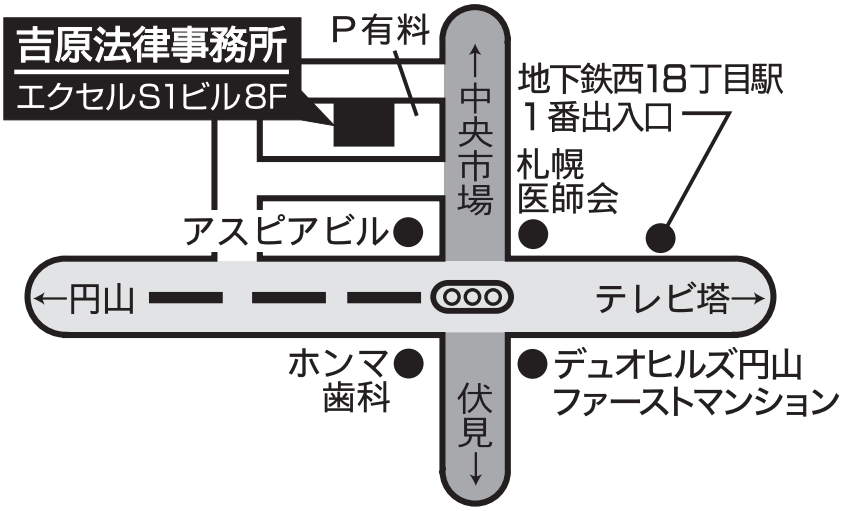
吉原法律事務所

札幌弁護士会　弁護士　吉 原 美 智 世
（昭和 48 年増殖学科卒業）

お気軽にお問い合わせ下さい

TEL 622-7963　FAX 622-8414

札幌市中央区大通西20丁目2-20（エクセルS1ビル8F）
交通 東西線西18丁目地下鉄1番出口
E-mail lawyer@yoshihara-lawoffice.jp



営業時間においでになれない方はご相談下さい。